

新國文讀本

卷四

375.9  
Y019  
資料室

41421

教科書文庫

4

810

41-1933

20030  
1713

52  
1949

Kodak Gray Scale

C  
Y  
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8  
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

3 2 1 20 6 8 7 9 5 4 3 2 1 10 6 8 7 9 5 4 3 2 1 0

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5  
JAPAN  
10  
1 2 3 4 5

資料室

375,9  
4019

文部省檢定濟

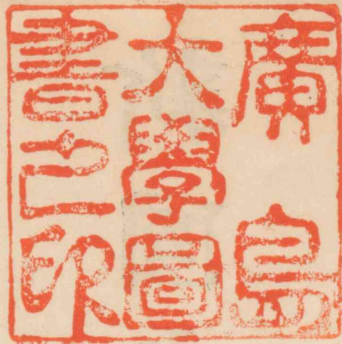
昭和三十八年一月十三日  
昭和三十八年七月十三日  
中學國語教科用科  
實業學校國語教科用科

吉田彌平編

新國文讀本

卷四

東京 光風館藏版



新國文讀本卷四

目次

一	明治神宮	溝口白羊	一頁
二	松の夕日		一四
三	武藏野の路	國木田獨歩	一七
四	栗子の喩	幸田露伴	二五
五	天然の恵	千家元麿	三〇
六	詩聖タゴール	荒井寛方	三三
七	柿二つ	高濱虚子	三九

目

次

一

八	△ 豆柿と小禽	北原白秋	咒
九	△ 鈴 蟲	松岡讓	弄
一〇	牛 祭	萩原井泉水	突
一一	土器賣る翁	柳澤淇園	毛
一二	◎ 豊臣太閤の文事	三上參次	六
一三	淺野長政	新井白石	八
一四	伊豆の松山	吉田絃二郎	叁
一五	磯邊の小石	相馬御風	一〇二
一六	杉浦重剛翁 その一	小笠原長生	一〇七
一七	杉浦重剛翁 その二	小笠原長生	一二四
一八	◎ 樹 の 根	和辻哲郎	一三三

一九	冬 の 姿	吉江孤雁	一三三
二〇	雪	堀口大學	一三六
二一	東國武士	萩野由之	一四二
二二	伊達政宗	湯淺常山	一四九
二三	浦鹽より	太田覺眠	一五五
二四	尊皇の精神	芳賀矢一	一六〇



新國文讀本 卷四

溝口白羊

文學者

名は駒造

明治十四年大阪生

代々木の森

今の東京市澁谷區代

代木

一 明治神宮

溝口白羊

快美なる色彩の反射と和らかい感觸とをもつた秋の陽光に包まれてゐる代々木の森。私はそれを仰ぎながら、そして何處からともなく高くにほつて來る新しい檜の香をかぎながら幾度そこを通つたことであらう。森の中からは、時として、石を切るらしい金屬的の響や、木を削るらしい輕快な音が、快い調子を作つて流れて出た。

或時は、無数の蟻の集團が大きな餌を引くやうに、六七丈もある大きな獻木を牛車に載せて、多数の人夫が汗みどろになりながら曳々聲して森の中へ曳入れるのを見たこともあつた。

あの中に明治神宮が建つのだ。さうおもふと、私の心は莊嚴な或衝動を感じると同時に、何となく強い懐かしさが充溢した。そして毎日のやうに其處を通る度に、工程が目に見えて段々はかどつて、基礎工事が終り、小屋組が出来て、殿舎の形の次第に整つて行くのが、たまらないほど嬉しく思はれた。

其の明治神宮がとう／＼竣工を告げた。

流造

ながれはぶづくりともいふ  
側面は破風造で棟から前の軒先までを棟から後の軒先までより長くしてそりをもたせた造り方



かつて赤土の露出してゐる上に、鋭く尖つた切石が幾つものならんで、烈しい日に光つてゐるのを見た處には、今清々しい色の小砂利を敷きつめた參道の白い線が、常緑の森の中に長く續き、その以前、疎な松林の中から耕地の廣く展開してゐるのが見渡された御料地は、いつの間にか、すつかり見ちがへる程美しい景色になつて、森嚴と幽邃との趣を兼備へた鬱蒼たる密林の中から、謂はゆる流造素木の神殿の見えつ隠れつしてゐるのが、何ともいへない神々しい感じを起させる。

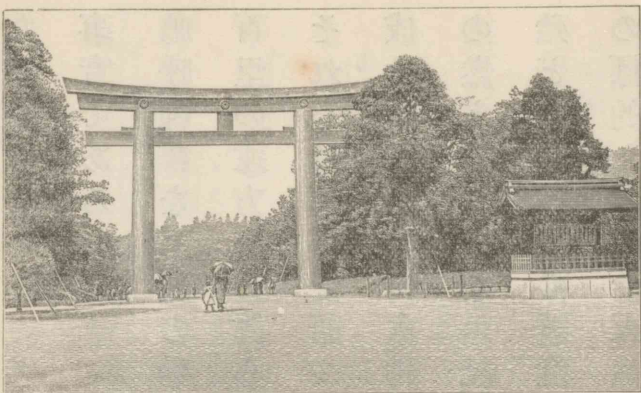
神域。眞に神のいまし給ふに適した莊嚴と靜寂と優雅との地域。私ははじめて完成した明治神宮の神苑に立つた

尺  
切口一尺四方長さ二  
間の材木を尺一本  
といふ

とき、其の改つた光景を見て、今更のやうに強烈な感激に打たれた。何者の力が此の新しい建設の事業を完成させたのであらう。造營局の記録の上には、大正四年四月起工以來、直接造營の事に當つた延人員が百數十萬人であり、用材の總計が尺一萬九千本であるといふやうなことが細密な數字の計算に基づいて書いてあるが、さういふ數字を高く超越して隠れた部面に働いた強い力こそ、實に此の明治神宮の基礎を千載不動の固さに築きあげたものであつて、山よりも高い明治天皇の御聖徳と、海よりも深い昭憲皇太后の御仁慈と、此の二柱の大神の御恵に對へ奉る國民の至純なる感謝の心情と、此の三つのものが陰に陽に工程を抄

らせて、遂に此の記念すべき大工事を完成するに至らしめた原動力であることは、何人も疑ふことの出来ない明瞭な事實である。

嗚呼、純粹な至誠の動機から出た青年團の造營奉仕、百里二百里の遠方から真心をこめて輸送して來た無數の獻木。それらは何事を語つてゐるか。實に此の神宮の御苑を形成する一株の樹木、神殿を組織する一本の柱にも、悉く國民の燃えるやうな熱誠がこもつてゐるのである。かくして、殆ど全く國民の誠意を以て完成したこの宮居に、國民崇敬の標的たる明治天皇昭憲皇太后の神靈が宿らせ給ふのである。何といふ美しい、尊い事實であらう。



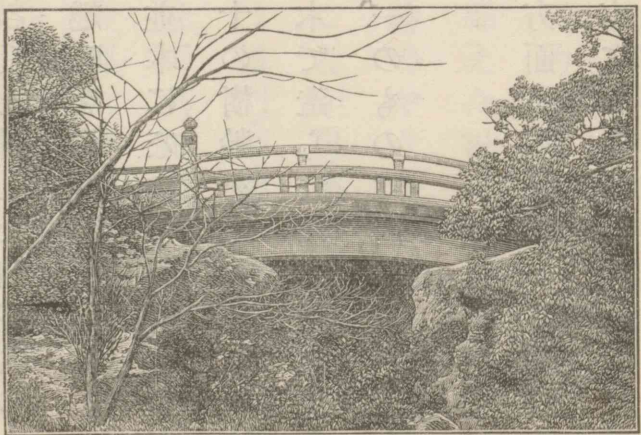
今までの神社に曾て見たことの無い明治神宮の特色は實にこゝに在るのである。私は表參道を一直線に進んで神宮橋畔第一鳥居の前に来て、遠く神域の中を望み見た刹那、第一に此の事を直感した。そして一步步美しい小砂利の上を、神殿に近く踏入るに随つて、愈、肅然たる心持になつて、深く襟を搔合はせた。參道の兩側には盡きることを知らない密林がどこまでも長く續いて、行くに随つて段々濃

明治神宮第一鳥居

萬成  
花崗石の名産地

紅於  
霜葉ハ二月ノ花ヨリ  
紅ナリ。(霜葉紅於  
二月花)  
唐の杜牧

くなつてゐる。  
鳥居から約一町ばかり奥へ入つて神橋の處へ來ると、何處からともなく清冽な水の落ちる音が聞えて來る。岡山市萬成産の石で出來てゐるといふ勾欄に凭つて下を見ると、溪流の趣を摸した風致の好い細流の兩岸、筑波山の國有林から移した自然石の配置された處に、數十株の楓が、今しも紅於の影を水面に落して、美しい秋の錦



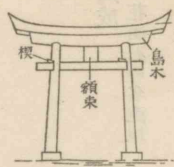
明治神宮神橋



を織つてゐる。此處は神苑の中で唯一の人工を加へた處で、神苑の殆ど總べてが繊細な技巧を排した自然的大觀を呈してゐる中に、特殊の庭園趣味を發揮してゐる。

神橋を渡ると、兩側は一帶の杉並木になつてゐて、その左側の並木が斷えた處に、千七百四十の樹齡を重ねたといはれる直立六丈餘の臺灣産檜の古木で造られた大鳥居がある。明神鳥居としては實に日本第一のもので、高さは三丈九尺に達するとのことだ。

此の鳥居の在る處は南方原宿方面から來てゐる幅員八間の南參道と北方千駄ヶ谷から來てゐる幅員六間の北參道との接合點で、此處から左折すれば、道は更に十間の幅員に



明神鳥居

柱は圓く笠木や鳥木はそりを持ち額束やくさび(楔)がある

原宿

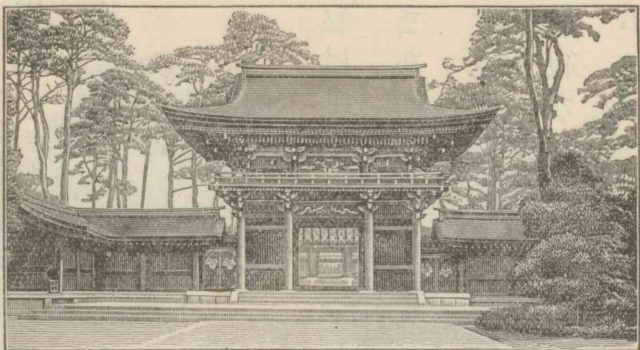
東京市澁谷區原宿

千駄ヶ谷

東京市澁谷區千駄ヶ谷

土佐繪

平安朝の末に起つた風俗畫 藤原基光同隆能などを祖とする



明治神宮南神門(樓門)

擴大されて西を指すこと百五十間、その道の盡きた處で右を見ると、ばつと眼界は廣く且明るくなつて、約一町の北方に、亭々として高く聳えた松の疎林を背景にした土佐繪のやうな神殿の檜皮葺を拜することが出来る。

御社殿は樓門・拜殿・本殿等の建造物を合はせて、其の總坪數六百五十坪。本殿は全部木曾御料林産の檜材を以て造られてある。近く拜殿に昇つて拜すると、芳しい檜の香氣が強く鼻を撲つて、いかにも

何事の  
西行法師の歌

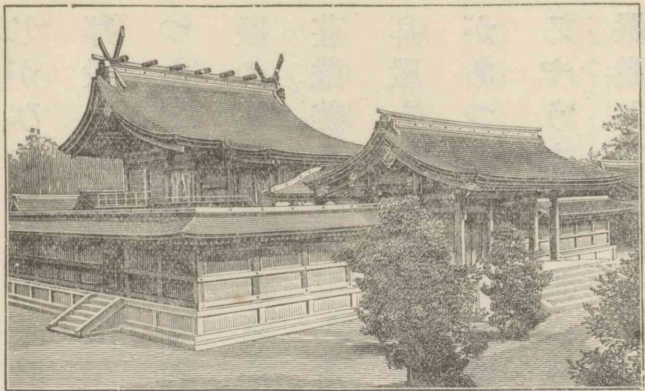
神の新しい宮居らしい一種の崇高な感じに打たれる。拜殿から中門を通して奥は即ち神靈のおはします内々院で、衆庶の漫に窺ふことを許されない神聖の場所である。

何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに

涙こぼるゝ

私は黙禱を終へて、始めて向ふを見上げた。

まあ、何といふ明るい、快い感じを持つた社殿だらう。今まで見た大抵の社殿が皆暗い周囲から来る鈍い光波の中に、静寂な、しかし陰鬱な感じを漂はせて居る中に、此の神宮ばかりは隠す所の無い心持で、十分な光線に總べてを解放し、總べてを露出して見せてゐる。しかも、それでゐて決して



浅膚な心持はせず、却つて一層深く大きくされた静寂の

中から、譬へやうのない莊嚴な感じが滲透して来て、自然と頭のさがるやうな強い威力が迫り来るのを覚えるのだ。

いかにも明治天皇の神靈を奉祀するにふさはしい神宮である。

久しく宮廷に蟠つてゐた一切の舊弊を排除して、國民と近く觸接

し、國民と親しく協力して新文明を吸収しようと御勉め遊ばされた明治天皇の活動的進取

的の潤達な御氣象に對して、いかにもその明るいお宮の感じがびつたりと呼吸を合はせてゐるやうに思はれる。拜殿を中心にして左右に均齊を保ちながら、長く兩翼を張つた廻廊に見える幾多の列柱、そして其の奥につゞいて便殿の遠く望まれる心持、それら總べてが、又、たとしへもない莊嚴美を語つてゐる。

拜殿を下りて、西神門から出ていくと、約一町に互る森林帯があつて、その向ふ、廣く開けた明るい視野の中に、目の覺めるやうな芝生地が一面に緑の色を展べてゐる。嚴肅から快活へ、莊嚴から優雅への急轉が其處に見える。私はこれらを一わたり拜見して廻つて、涙ぐましい程の強

い感激に打たれながら、夕暮近くなつたので御門を出た。振返つて見ると、神殿のあたりはすつかりもう深い靄に包まれて、晝でも暗いほど黒々と生ひしげつてゐる樹林の中を、かつきりと切開いたやうに路線の白い色の暮残つて續いて見えるのが、何となく嚴肅な氣分を起させた。

私の胸には、其の神祕な境の中に、ほんのりと浮んで見える素木造の神殿と、檜皮葺の屋根とを美しく流れてゐる優雅な曲線が、神域を出てからも、いつまでも長く鑄附けられたやうに残つてゐた。

一草一木の末にも祭神二柱の御威靈の宿つてゐる森嚴な、幽邃な、優雅な神苑よ。長い私の一生を通じて、果して此の

深い印象を忘れる日があるだらうか。(明治神宮紀)

小澤蘆庵

歌人  
尾張に生れ京都に住んだ  
享和元年(三四六)歿  
年七十九

二 松の夕日

小澤蘆庵

遠山は入日のなごりなほ見えて野は霧わたる秋の夕ぐれ

筆蹟

かすめる月かけ  
るゑに  
雲もなくなきたる空  
に影みえてゆくとも  
みえず霞む夜の月  
蘆庵

こすめる月  
かすめる月  
かすめる月  
かすめる月  
かすめる月  
かすめる月  
かすめる月  
かすめる月  
かすめる月  
かすめる月

加藤千蔭

國學者  
家の號は芳宜園  
江戸の人  
文化五年(一四六)歿  
年七十四

加藤千蔭

見わたせばくもるはるかに雁鳴きて千町のをしね  
いろづきにけり

村田春海

國學者  
家の號は織錦齋  
江戸の人  
文化八年(一四七)歿  
六十六

村田春海

雨はるゝゆふぐれ竹の奥しめてしめやかに鶯  
のこゑ

釋良寛

越後の歌僧  
天保二年(一四九)歿  
年七十四

釋良寛

飯乞ふとわが來しかども春の野にすみれつみつゝ  
時をへにけり

筆蹟

寄神祝  
すべらぎはあきつ神  
なり秋つしま動くべ  
き世のあらんと思ふ  
な 景樹

寄神祝

すべらぎはあきつ神  
なり秋つしま動くべ  
き世のあらんと思ふ  
な 景樹

香川景樹

歌人  
家の號は桂園  
因幡の鳥取に生れ京  
都に住んだ  
天保十四年(一五三)卒  
年七十六

香川景樹

風わたる淺澤水のさゝなみもこゝろにとまる夏は

加納諸平

國學者

遠江に生れ和歌山藩に仕へた  
安政四年(二五七)歿年五十二

橋曙覽

福井の歌人  
明治元年歿年五十七

大隈言道

福岡の歌人  
明治元年歿年七十一

來にけり

加納諸平

姫島の松の夕日にかりなきわが子こひしき秋風ぞ吹く

橋曙覽

たのしみは妻子むつまじくうちつどひ頭ならべて物をくふ時

大隈言道

さし柳さしていくかも經ぬものを根ざしひき見る友わらはかな

武藏野

武藏國一圓にわたる

大平野

國木田獨歩

小説家

名は哲夫  
千葉縣海上郡銚子町生  
明治四十一年歿年三十八

三 武藏野の路

國木田獨歩

武藏野を散歩する人は路に迷ふことを苦にしてはならない。どの路でも、足の向く方へ行けば、必ずそこに見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武藏野の美は、たゞその縦横に通ずる數十條の路をあてもなく歩くことによつて始めて獲られる。春・夏・秋・冬、朝・晝・夕・夜、月にも、雪にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、たゞ此の路をぶら〜と歩いて、思ひつき次第に右―左すれば、隨處に我等を満足させるものがある。これが實に武藏野第一の特色だらうと、自分らしみ〜感じてゐる。武藏野を除いて、日本に此のやうな處がどこにあるか。北海道の原野には無論のこと、那須

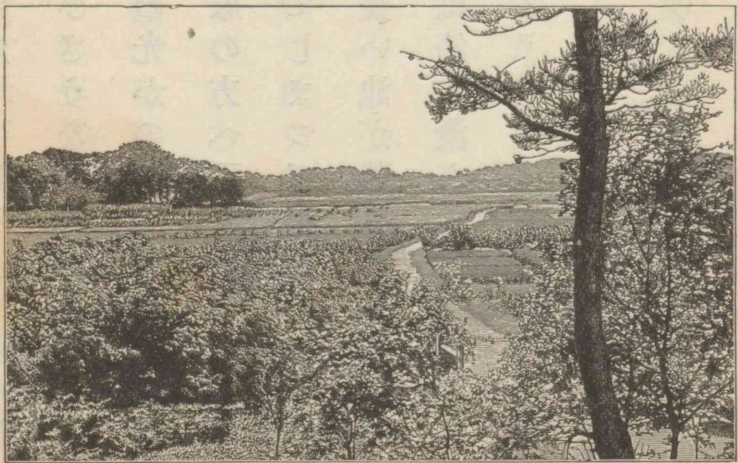
那須野

栃木縣下野國那須郡三島村及び太田原町から東の方磐城の國境に至る廣原

野にもない。その外どこにあるか。林と野とがかくもよく入亂れて、生活と自然とがこのやうに密接してゐる處がどこにあるか。

されば、君若し一の小徑を行き、忽ち三すぢに分れる處に出たなら、困るに及ばない。君の杖を立てて、その倒れた方に往きたまへ。或はその路が、君を小さな林に導くかも知れない。でも、迷はずに往きたまへ。林の中ごろに至つて、又二つに分れたなら、その小さな路を選んで見たまへ。或は、その路が君を妙な處に導くかも知れない。これは林の奥の古い墓地で、苔むす墓が四つ五つ並んで、その前に少しばかりの空地があつて、その横の方に女郎花などの咲いてゐ

ることあらう。頭の上の梢で小鳥が鳴いてゐたら、君の幸福である。すぐ引返して左の路を進んで見たまへ。忽ち林が盡きて、君の前に、見渡しの廣い野が開ける。足もとから少しだら／＼下りになり、萱が一面に生え、尾花の末が日に光つてゐる。萱原のさきが畑で、畑のさきには背の低い林が一叢しげり、そ



武 藏 野

の林の上に遠い杉の小森が見え、地平線の上に淡々しい雲が集つてゐて、雲の色にまがひさうな連山がその間に少しづつ見える。十月、小春の日の光がのどかに照り、小氣味よい風がそよ〜と吹く。萱原の方へ下りてゆくと、今まで見えた廣い景色が悉く隠れてしまつて、小さな谷の底に出るだらう。思ひがけなく、細長い池が萱原と林との間に隠れてゐたのを發見する。水は清く澄んで、大空を横ぎる白雲の斷片を鮮かに映してゐる。水のほとりには枯蘆が少しばかり生えてゐる。

此の池のほとりの徑を暫くゆくと、又二つに分れる。右にゆけば林、左にゆけば坂。君は必ず坂を登るだらう。とか

く武藏野を散歩するのに、高い處、高い處と選びたくなるのは、何とかして廣い眺望を求めらるからだ。しかも、その望は容易に達せられない。見おろすやうな眺望は決して出来ない。それは初からあきらめたがよい。

若し君、何かの必要で道を尋ねたく思ふなら、畑の眞中にゐる農夫に聞き給へ。農夫が四十以上の人であつたら、大聲をあげて尋ねて見給へ。驚いて此方に向き、大聲で教へてくれるだらう。若し少女であつたら、近づいて小聲で聞き給へ。若し若者であつたら、帽子を取つて慇懃に問ひ給へ。鷹揚に教へてくれるだらう。怒つてはならない、これが東京近在の若者の癖であるから。

教へられた路を行くと、路が又二つに分れる。教へてくれた方の路が餘りに小さくて、少し變だと思つても、そのままかまはずに行き給へ。突然農家の庭先に出るだらう。果して變だと驚いてはいけぬ。その時農家で又尋ねて見給へ。「門を出るとすぐ往來ですよ」と、すげなく答へるだらう。農家の門を外に出て見ると、果して見覚えある往來、成程これが近路だなと、君は覺えず微笑を漏らす。その時始めて教へてくれた路の有難さが分るだらう。

眞直な路で、兩側とも十分に黄葉した林が四五町も續く處に出ることがある。此の路を獨り靜かに歩むのはどんなに楽しい事だらう。右側の林の頂には、夕日が鮮かに輝いてゐる。折々落葉の音が聞えるばかり、あたりはしんとして、いかにも寂しい。前にも後にも人影が見えず、誰にも遇はない。若しそれが木の葉の落ちつくした頃ならば、路は落葉に埋れて、一足毎にがさ／＼と音がする。林は奥まで見透かされ、梢のさきは針の如く細く蒼空を指してゐる。猶更人に遇はない。愈々寂しい。落葉を踏む自分の足音ばかり高く、時に一羽の山鳩のあわたゞしく飛去る羽音に驚かされるばかり。同じ路を引返して歸るのは愚である。迷つたところが今の武藏野に過ぎない。まさかに行暮れて困る事もあるまい。歸りも凡その方角をきめて、別な路をあてもなく歩く



山は暮れ  
與謝蕪村の句

が妙。さうすると、思はず落日の美觀を獲る事がある。日は富士の背に落ちようとして、未だ全く落ちず、富士の腹に群がる雲は黄金色に染まつて、見るがうちに様々の形に變ずる。連山の頂には白銀の鎖のやうな雪が次第に遠く北に走つて、終は暗澹たる雲の中に没してしまふ。日が落ちる。野は風が強く吹く。林は鳴る。武藏野は暮れようとする。寒さが身にしむ。その時は路を急ぎ給へ。顧みて思はず新月が枯木の梢の横に寒い光を放つてゐるのを見る。風が今にも梢から月を吹落しさうである。突然又野に出る。君はその時、  
山は暮れ野は黄昏の薄かな

の名句を思ひ出すだらう。(武藏野)

四 栗子の喩

幸田露伴

幸田露伴  
文學者  
名は成行  
文學博士  
慶應三年(一八五七)江戸生



籬の中に栗子あり。其の數およそ百箇ほどあり。百箇ほどの中には、すぐれて大きなるあり、大きからず小さからぬあり、小さきあり、きはめて小さきあり、一つ栗子あり、三つ栗子の中なるあり、端なるあり、夫婦栗子あり。百箇が百箇皆同じからず、それゝに異なる大きさを異なる形し

て具したり。

或人其の栗子を食ふに、先づ其の百箇ほどの中の最も大にして最も好き形したるを取りて食ひ、次には残れる中の最も大にして最も好き形したるを食ひ、又次には又残れる中の最も大にして最も好き形したるを食ひ、其の又次には其の又残れるが中の最も大にして最も好き形したるを取りて食ひ、食ふごとに、毎に現在せるものの中の最も大にして最も好き形したるを食ひ、終に其の百箇ほどの栗子を皆食ひ盡くせり。

其の人は百箇ほどの栗子を食ひ盡くす間、常に最も大にして最も好きものを取りて食ひて、一度も小さくして好からぬ形したるを食ふこと無くて終れるなり。即ち其の人は常に、最も優れたるものを取りて、一度も劣れるものを味はふこと無く終れるなり。

同じやうなる籬に同じ數ほどの栗子あり。これもまた、大きなる、小さなる、それとに異なる大きさを異なる形して具したること、前に言へるとほとと相異ならず。

こゝに人ありて其の栗子を食ふに、先づ其の百箇ほどの栗子の中の最も小さくて最も好からず見ゆるを取りて食ひ、次には、其の残れる中の最も小さくて最も好からず見ゆるを取りて食ひ、其の又次には、其の又残れるが中の最も小さくて最も好からず見ゆるを擇み取りて食ひ、かくして終に

百箇ほどの栗子を食ふに、毎に其の最も小さく最も好からぬのみを取りて、やがてこれを盡くせり。

其の人は百箇ほどの栗子を食ひ盡くす間、常に最も小にして最も好からぬを取りて食ひて、かつて一度も大きくて好きを食ふこと無く終れるなり。即ち其の人は常に――最も劣れるを取りて、一度も優れたるものを味はふこと無く終れるなり。

甲の人も乙の人も、其の食ひたる栗子の量は同じほどなり。されど、其の趣はいたく異なり。

甲の人は、常に其の最も優れたるを味はへるなれば、其の心は常に悦を抱き得べし。乙の人は、常に其の最も劣れるを

味はへるなれば、其の心常に貧しかるべし。

されど、甲の人は、其の實一つく――食ひ進むごとに漸く小さく漸く好からぬを味はふことなれば、悲しきやうなる心地もあるべし。乙の人は、其の實一つく――食ひ進むごとに漸く大きく漸く好きを味はふことなれば、心悦びのせらるゝ方もあるべし。

思ひ做しにて、甲の人も常に自ら是とし、自ら悦ぶを得べし。又思ひ做しにて、乙の人も常に自ら是とし、自ら悦ぶを得べし。氣の持方にて、甲の人も自ら慊らず、常に自ら悲しむべく、乙の人も常に自ら慊らず、常に自ら悲しむべし。人の一つづつ年をとるは、猶一つづつ栗子を食ふが如し。たとへ

許の栗子を食へる時、我が壽命の終りて其の栗子を食ふに堪へざるに至るや否やは測るべからざることなり。栗子は人々の擇み取るに任されたり。誰も汝此の栗子を取る勿れといふものなし。(洗心廣録)

千家元磨  
詩人  
明治二十一年東京市  
生

五 天然の恵

千家元磨

私は只眺めよう、  
私は只自分を空しくして  
天然の與へる恵に浴さう。  
私は自然を讃へることより出來ない。  
私を貫く美は私を燃し、

私を讚歎の情に満たしてくれる。  
どこにこんなに私を有頂天の喜に  
満たしてくれるものがあらう。  
私はどこにも無いことを斷言する。  
お、この缺けることのない歡喜よ、  
いつも儼存する歡喜よ、  
永遠に朽ちも荒れもしない歡喜よ。  
私は本當に聖らかなこの空間を  
溢れる愛をもつて讚め歌ふのだ。  
聖さよ、聖さよ、  
この大いなる宇宙を飾る自然の一切が、

大いなるものも、小さなものも、何といふ聖らかな  
 神の面影を宿してゐるのだらう。  
 聖にして大なる田園よ、  
 百姓は百姓以上のものである。  
 木に繋がれて草を食んでる牛は牛以上のものである、  
 樹木も草も彼以上のものである。  
 そこで私は我々を生かし満たす力に感謝する、  
 私たちの周囲を取巻くこの儼存する神祕に向つて、  
 私は歡喜に燃えて禮拜する。  
 私を高めてくれ、自然よ。  
 私を鼓舞してくれ、自然よ。

私を恍惚としてその靈感の中に抱きあげてくれ。  
 私はいつも楽しくこの靈感の中に  
 鼓舞されて生きてゐたく思ふ。(炎天)

六 詩聖タゴール

荒井寛方

「日本の畫家を印度に招聘したい」といふタゴール翁の希望  
 に應じて、豫てから印度藝術に志してゐた私は、大正五年か  
 ら足かけ二年、カルカッタのタゴール家に起臥してゐた。  
 カルカッタ市を去ること百マイル、廣漠たる大平原の眞中  
 に鬱蒼と生ひ繁る森がある。サンケニタンの森と呼ばれ  
 て、そこにタゴール翁の學校があつた。今日は久しぶりに

タゴール 印度の詩人  
 思想家  
 東洋に於ける最初のノ  
 ーベル文學  
 賞受領者  
 Sir Rabindranath Tagore (1861—)  
 荒井寛方 畫家  
 日本美術院同人  
 明治十一年栃木縣生  
 カルカッタ  
 Calcutta インドのベンガ  
 ル州の首都

Borpur  
ボルポール

翁が外國の旅から歸るといふ日、途中まで翁を出迎へた私は、翁と一緒にその學校に行くことになつた。

眞夜中の十二時、汽車がボルポールの驛に着くと、手に燃えさかる松明をかざした二百人ばかりの白衣の生徒が待つてゐた。そして翁が汽車からおりると、生徒等はどつと駈寄つて、口々に祈のやうな言葉を叫びながら、身動きも出来ぬやうに翁を取巻いてしまつた。半年ぶりに相逢ふ師と愛弟子とのうるはしい抱擁。異國の旅人に過ぎない私の胸にも、人の心の温かさがしみとと通つた。

翁はそこから裸足になつて學校まで一里餘りも歩いた。途々にはあかくと籐が焚かれて、それが自然木で作られ



た學校の門まで續いてゐた。門の眞下には綺麗な色彩の蓮座が置かれてある。やがて翁はその上にすわつた。莊嚴な祈と合唱の歌聲とが一時深夜のサンケニタンの森にこだまして、歓迎の式は一時間ほどで濟んだ。その夜、私は翁と共に長屋のやうな寄宿舍に泊つたが、佛陀の國の古い夢が現實の眞となつて眼前に現れるやうな氣がして、この神祕めいた印度の一夜を寢こんでしまふのが何だかもつたいないやうに思はれた。

シャーラ  
沙羅



Baniam  
榕樹



その翌日の晩だつた。「タゴール先生のお話があるから」といふので、私はひとりシャーラ・バニヤンなどの熱帯植物が黒々と繁りあつてゐる森の中に分けいつた。學校といつても樹下の教場だ。太古を思はせる静寂な森の奥深く、篝火がゆらゆらと闇を照らして、樹陰に据ゑられた眞白い大理石の石座の上に翁は静かにすわつてゐた。生徒たちは翁を取巻いて、めいめい地上に安坐して、ぐるりと圓陣を作つた。そして、翁の口から高く低く、銀鈴を轉がすやうな聲で語り出される珠玉のやうな詩の言葉に、じつと聽入つてゐた。

あるともしもない風にゆらめく篝火に、清らかな白衣を纏う

たタゴール翁の姿がくつきりと闇の中に浮いて見えた。肩に垂れんとする豊かな純白の髪、胸に波打つ銀髯、詩の一句一句の中に燃えるやうな祖國愛を説き、印度の眼覺めを説く哲人タゴールの姿は、聖者の坐像に、神靈の息吹が永久の生命を吹込んだのだ。サンケニタンの夜の森に、今、古の聖者がうつせみの世の人の姿を假りて暫し降り立つたのだ。何といふ神秘的な、宗教的な、そして詩的な情景だらう。眞に宇宙の靈と人間の魂との合一境だ。近づかうとすれば、私の足はおのづと立ちすくむやうに覺えた。

タゴール翁の邸は、イタリイ風を幾分加味した豪壯な三階建の建物で、室の數など幾つあるか知れぬほどのすばらし

い大きいものだつた。タゴール翁はタゴール族の宗家を  
 繼いだ人で、一族中の困つてゐる人たちは、みんなこの二百  
 年もたつた古い大きな建物の中に  
 世帯を持つてゐた。邸に隣りあつ  
 て、音楽・美術・工藝・文學を研究するヴ  
 イヂットラと呼ばれる研究所があ  
 つた。翁は一週に一度、百人位の青  
 年をこゝに集めて、ある時は座談を、  
 ある時は詩の朗讀會を開いた。自  
 作の芝居をすることもあつた。  
 翁は家にゐる時、夜になると、いつも屋上をぶら〜と歩き



家一ルーガタるけ於にラトッヂィヅ

高濱虚子  
 俳人  
 名は清  
 明治七年伊豫國松山  
 生  
 ランプ  
 Lamp 石油燈  
 上野の森  
 東京下谷區上野公園  
 の森  
 根岸  
 上野公園の北の麓に  
 ある地  
 正岡子規の住宅はこ  
 こにあつた

まはつた。天を仰いで、は生命あるものの如く瞬く星を眺  
 め、やがてじつと動かざる人のやうに深い冥想にふける。  
 この時、翁の詩想はきつとはち切れるやうにふくらむのだ  
 らう。晝になつてカルカッタの町のすべての人々がたわ  
 いもない午睡の夢を貪る頃、翁だけはいつもペンを握つて、  
 昨夜の屋上の思索を、詩に論文に書きつゝつてゐた。

(世界人の横顔)

七 柿 一 一 つ

高 濱 虚 子

ランプの光は静かに更けて行つた。時々上野の森に反響  
 して轟き過ぐる汽車の音があるばかりで、根岸の夜は沈ん



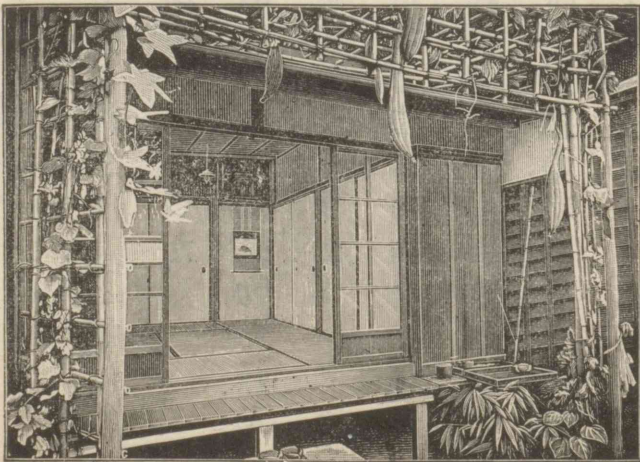
彼  
正岡子規

だやうに寂しかつた。  
日によつて不定ではあるけれども、此の頃は一體に彼の熱は夜に入つて下ることが多かつた。夜中頃から再び上るのではあるが、其の平熱になつた時の心持は流石にすがすがしかつた。病主人の頭はさういふ時に一層透明になるのであつた。彼は自分を神かと疑ふばかりの明快な判断を數かぎりない句の上に下すことが出来た。句の良否は色の黑白の如く明白に、一見して立ちどころに判断することが出来た。自分で自分を怪しむ位に、それが容易に且迅速であつた。

今年  
明治三十五年

彼の寂しい家庭には、六十を過ぎた老母と今年二十七にな

つてまだ嫁がない妹とがあるばかりであつた。老いたる母も、嫁期を失した妹も、唯主人の病を看とるために生きてゐた。二人は次の室の暗いランプの下で、病室の物音に耳を欬てながら、各黙つて針を運んでゐた。  
やがて妹は膝の絲屑を拂つて立上つた。それは病主人の枕許に盆に載せた柿を運ぶためであつた。



庵 規 子

「もうこれぎりかい」と彼はながし目に其の盆の柿を見ながら聞いた。

「昨日あんなにお食べたから、もうこれぎりよ」と妹は答へた。盆の上にはたゞ二つしかのつてゐなかつた。

彼は總べてのものに健啖である中に、殊に果物を好んで食うた。中にも柿は飽くことを知らなかつた。

彼は忽ち食指が動いたのだが、たゞ二つの柿を今食つてしまふことは心細かつた。それは是非とも今日の大事業——投書函の一掃——が完了した時の慰藉の料に取つて置かねばならなかつた。彼は心のうちで呟いた。「選がすんでしまつたら、此の柿を御褒美にやるよ。今一息だ。たゆまず

に片附けてしまへ」と。かくて漸く底の見えて來た句稿の選に、更に一心不亂に取掛つた。

燈火は、主人の心を知るかのやうに、瞬きもせず牙渡つた。傍の火鉢に炭のつがれた事も、時計が十二時を打つた事も、老いたる母の寢床にはいつた事も、彼は知らぬではなかつたが、其等は餘り深く其の注意を惹かなかつた。妹が床にはいつたのはそれから一時間も後であつたが、それは其の物音が兄の仕事の妨にならぬやうに、いつふせつたとも分らぬ位ひそやかであつた。

静かな沈んだ夜の呼吸が聞えた。彼の目は燈火に光り輝いて、此の夜の色の中にひとり帝王のやうな威を示してゐ

た。  
 最後に手に當つた草稿を見終へた後、彼は念のため投書函をかき探して見たが、もう其處には一枚も留めなかつた。彼は朱筆を投棄てたまゝ、両手で頭を抱へて暫く身動きもしなかつた。  
 久しく心に掛つてゐた仕事を片附けてしまつた慄へるやうな満足的情と、病軀に不相應な努力のあとに來る疲勞の恐とで、彼の心は暫く搔亂されてゐた。が、やがて其の頭を抱へてゐた手をほどいて蒲團の外に現した彼の顔はいよ  
 いよ興奮して、蒼白い皮膚の中にも、頬のあたりの赤みは色を増してゐた。

筆蹟

青梅をかきはじめなり  
 菓物帖  
 南瓜より茄子むづかしき  
 寫生哉  
 病間や桃食ひながら  
 李畫く  
 畫がくべき夏のくだ  
 物何々ぞ  
 畫き終へて晝寢も出  
 來ぬ疲れかな

もう時計は二時を過ぎてゐたが、彼は少しも睡いとは思はなかつた。燈火を中心とした此の病床六尺の天地は、今は何物にも煩はされることのない、極めて自由な、希望に充ちた世界の様に思はれた。今や彼の體温は再び上つて、其の爲にいつもの酒に酔つた様な興奮した心持になつてゐるのであるといふ事には氣がつかうともしなかつた。



正岡子規筆

青梅をかきはじめなり菓物帖  
 南瓜より茄子むづかしき寫生哉  
 病間や桃食ひながら李畫く  
 畫がくべき夏のくだ物何々ぞ  
 畫き終へて晝寢も出來ぬ疲れかな

彼は煩はしげに盆の上の柿を見やつた。柿の赤い色は媚びる様に輝いてゐた。抑へてゐた彼の食欲は猛然として振ひ起つた。彼は餓ゑた虎が残忍な眼を光らせて兎を攫む様に、忽ち其の柿の一つを取上げて、皮をむき始めた。

此の柿は、京都伏見の桃山に庵を結んでゐる愚庵といふ禪僧から贈つて來た釣鐘といふ珍しい名の柿であつた。さういへば、形がどこか釣鐘に似てゐた。此の禪僧といふのは、維新の戦亂に母と妹とが生死不明になつてしまつた其の行方を何十年かの間探したが、遂に見當らなかつたことが動機となつて、中年から天龍寺の滴水和尚の鉗鎚の下に僧となつた人であつた。主人は既に數年前から交遊があ

愚庵

俗名天田五郎  
福島縣舊三春藩士  
明治三十七年寂  
年五十一

天龍寺

京都市右京區嵯峨に  
ある臨濟宗の巨刹  
京都五山の一

滴水和尚

俗名由利宜牧  
臨濟宗天龍寺派管長  
明治三十二年寂  
年七十八

つたのであるが、此の禪僧も主人と同じく肺を病んでゐる上に、萬葉調の歌をよくし、又書に巧であつた。俳句はやらなかつたが、其等の關係から互に推重して、何かにつけて贈答を怠らなかつたのであつた。今度の柿は、桃山の草庵に禪僧を訪ねた人が、其の庭前の柿を託されて、遙々と携へて歸つて病床に齎したものであつた。

それは昨日の事であつた。其の人がまだ枕頭に在る間に、彼はもう辛抱が出来なくなつて、其の柿を三つ續けざまに食つた。其の人が歸つた後も、夜寝る迄に十ばかり平げた。今夜枕頭に運ばれたものは其の残りのたゞ二つであつた。彼は其の一つを取つて其の皮をむくより早く、忽ちそれに

武者ぶりついたのであつたが、もう大方食盡くして葦の所に達したとき、少し顔を擧めた。それは稍、澁かつたのであつた。さういへば昨日食つたのも大方は少しづつ澁かつたのであつた。けれども彼はそれに頓着せず、其の葦の際まで少しも残さずに食つてしまつた。

三千の俳句を閲し柿二つ  
常用日記に、彼は毎日の出来事を句にして十句宛書くことを日課にしてゐた。明日になつて今日の部を認める時に、忘れぬやうに此の句を加へねばならぬと思つた。疲勞が一時に出て来るやうに思はれて、頭がぐらくした。彼は始めて熱の高いことを覺えたのであつた。(柿二つ)

北原白秋

詩人

歌人

名は隆吉

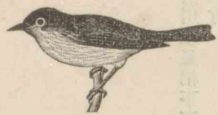
明治十八年福岡縣柳

河生

ベッド

Bed

目白



八 豆柿と小禽

北原白秋

この頃、毎朝ベッドの上で目がさめると、きまつて、私は此の長方形の硝子窓に目を留める。まだ緑がらの孟宗の光とそよぎとを背景にして、赤い豆柿の五つ六つが、つい近くへ届いた小枝の岐れに動いてゐる。胸毛の青い目白の一二羽が、きつと留つてゐるのである。或者は頭をうつむけにして、頬に實をつゝいてゐる。ともすると、その大きなベッドには坊やがぼかんと坐つてゐることがある。はいつてゆくと、これも亦柿の實の目白を見入つてゐるのである。この豆柿は家の裏、後の丘の竹藪の下にある。その幹は底

去年の地震  
大正十二年の關東地  
方大地震

此處  
神奈川縣足柄下郡小  
田原町

朝鮮式の茅屋  
この挿圖の家の裏手  
にある離家

の中に取込まれてゐたが、地震で庇を引きもがれてしまつた。去年の地震はこの家の屋根や庇の赤瓦を一つ残らずふるひ落してしまつた。その後の二秋ふたあきの豆柿の赤さはまた格別になつた。



家の 兔 木

この豆柿は、此處へ始めて居を卜して以來、いつも私の秋を楽しませてくれた。この洋館を建てる前には、この豆柿は朝鮮式の茅屋の奥の二疊の書齋の西の窓から面を出すと、仰がれた。だが、その季節になると、寺の和尚やかみさんが

はいつて來ては、叫びながら、みんな竹竿ではたき落してしまつた。この煩はしさは、どれだけ私の靜思と讀書とを妨げたか。私はそれを見ていつも障子をしめたが、心は平かでなくなつた。見て楽しみたいものを傍からはたき落される不快さはとにかくとして、妄にこちらの屋敷内のものを我が物顔に始末されるのが——それに、あまりに騒がしい人の心を見、聲を聞くのが苦しかつたのである。地代を拂つて住んでゐる以上、たとひ地主でも、かういふ心なき闖入を肯定したくはなかつたが、怒つたところで仕方がないので、この次からは、柿の實の代は別に拂ふことにした。それからは、私の書齋生活もしつとりと落ちついて來た。

鴨



目白がこぼれるやうにやつて來た。鴨も來た。百舌も頬白も小雀も來た。ねんごろない、秋になつた。小禽たちはつやくと熟した赤い實を一つ、丹念に枝を揺り揺り啄んで遊ぶ。その食べたあとには、べらくの皮だけが一つ、ひつかつたまゝに残されてゆく。たまゝ熟し過ぎて地に落ちると、それは鼠がちよろくと競つて嘗めに來るか、かゝへて草もみぢや嫁菜の花の間をもぐりくぐつて行くかした。小禽と鼠とへの供養の柿、その上の冬晴の空、全くこの家の空はさむくとして、しかも朗かであつた。その後、朝鮮式の小さな茅屋は西の竹藪の前に移されて、

その在つたところにこの洋館が建つたわけである。さうして、豆柿の枝が寢室の硝子窓につかへて來た。赤い實の點々も。

地震で裏の湯殿や洗面室の庇が大破した後の去年の秋は、階下からも廊下からも、仰ぐと、柿も小禽もその破れたあひだから楽しまれた。南の庭へかゝんでも、家の内から見通しに明るく美しく反射してゐたものである。今年はこのはれたその差出しの庇を下から一切取除いたので、なほさら明るくなつた。下手の茅屋の小窓からは、またよく私や子供が顔を突きだして仰ぐ。

小禽は一日中ひつきりなしに群れて来る。やはりこぼれるやうに枝移りするのは目白である。こちらの細枝からつい向ふの實をつゝきながら落ちさうになるものもある。うつむいて頭を突込むのもあれば、横から細い嘴を立てるのもある。目白は小さい。それは時として鴨でも来れば、實にその鴨が大きく見えるほど目白は可憐に小さい。青と萌黄の小禽。こゝの豆柿に来る目白は人をすこしも恐れなくて、いかに自分の楽しみを楽しみとしてゐる。遊びほれ啄みほれてゐる。だが、鴨は藪の向ふにばかり騒いで、はたくと柿へ移ると、啄む間もなくまた藪へ逃げてしまふ。人影さへさせば、もう落ちつけないのである。

鴨が来ると、目白が散る。しかし二羽三羽はまだ残つて、つましくつゝいてゐる。百舌が来ると鴨も目白も逃げる。百舌は柿の實よりも、弱い小禽を襲ふのである。見てゐると、小禽の生活も楽しいやうで、なか／＼安心もしてゐられなさうである。それはさびしい。それはとにかくとして、豆柿の赤いうちは小禽も楽しいであらう。おそらく、こゝらで残された赤い柿はこの藪かげの一本だけだらうと思ふ。それほどよその野山は目もかれて来た。

豆柿と小禽。私はよく地べたへ降りると、空を仰ぎほれる。たま／＼遊びに見える詩歌の友も、ほれ／＼と小禽の行ひ



を眺め入つては、「これはいゝ」といふ。(季節の窓)

鈴蟲



松岡讓  
文學者  
明治二十四年新潟縣  
生

九 鈴蟲

松岡讓

どす黒い土に砂をまぜた土を、これが鈴蟲の卵の入つてゐる土だといつて、尺二三寸直径の金魚鉢に、六分目位貫つて來た。晩秋の頃であつた。秋から冬、冬から初春へかけて、晝はなるべく日當りのいゝ南縁に鉢をおいて、土の表面がしつとりぬれるまで細かい霧を吹いてやつた。黒い砂土の間から、何が生れるものやらさつぱり分らない。分らないながらに、恵んだ人の教へたとほり、晝は日當りに水をやつては、夜は室内に入れて、互寒の厳しさを避けた。日に幾

サイダー  
Cider  
コップ  
Cup

度となく土の面を見守るが、たゞの砂、たゞの土で、變つたところは微塵もない。かうして丹誠の半歳が過ぎた。通常の球根や草花の種子ならば、とうに芽をふかなければならない頃である。金魚鉢の中の世界は、依然として昨秋の如く蕭索としてゐた。しかし、丹誠は酬いられた。初夏ともいひたい晩春の或朝のことであつた。常の如く霧を吹いてやらうと縁に立つて鉢を覗きこむと、昨日まで寂然と静まりかへつてゐた砂土が、丁度サイダーをコップについだやうに、小さい沫を無數に躍らせてゐた。視てゐるうちに沫の運動は愈盛になつて、鉢の眞中といはず、端といはず、幾百といふ原子のやう

な微粒子が跳上り飛上つて、恰も陽炎が動くかと思はれるばかりである。喜と驚の叫がおのづと口を衝いて出た。家中のものが南縁に集つた。さうして一齊に驚と喜の言葉を囁きあつた。正に土の手品である。日毎に沫の運動が活潑になつた。それから又陽炎の密度が段々薄くなつてきた。さうして土の表面には無数の蟲が現れてきた。蟲の数が又日毎に増してきた。さうして沫がぱつたり止んだ頃には、土が見えない位にまで蟲がわいた。さうして蠢々としていたいけな營みが始められた。そのうちに、一つ二つが十日もすると古い衣をぬいで、練絹のやうな新しい體で古い着物の上に止つて、いつの間にや

らぬいだ衣をたべてしまふ。と、又日毎に衣更があちこちで流行しだして、美しい體がちらちらと現れてくる。二度目の衣更がある。つゞいて三度目の衣更がある。衣更の度に體は見違へるほど大きくなつて、三度目が終ると、今度は黒光りのする西瓜の種子のやうな一匹の鈴蟲が生れるのである。小さい金魚鉢の世界は一日々々に變態してゆく。これまでは霧だけなのが、追々に餌を與へられるやうになる。西瓜の種は黙々として餌をたべる。鉢が狭くなつた。同じ位の鉢に三つに分ける。鉢の土は去年鈴蟲のゐたらしいと思はれる土手の下をほじつて、それに砂をまぜて前のやうにする。三軒の家族は、翅が生え

ても、足が長くなつても、出れば出られる鉢を逃げようとせず、おとなしく彼等の生活に餘念がない。廣くなつた世界には、箱庭の家や石燈籠や植込や築山や飛石が配置された。鈴蟲は小さいく、幼稚園の園兒のやうに、家に隠れたり、築山に登つたりして成長していつた。眞夏の候となつた。土用の焼きついたやうな雲が、空の一角にかゝつて動かない。世は酷熱の絶頂であるのに、夕になると秋の近づいた事を知らせ顔に、街にははや蟲賣の聲がする。家の鈴蟲は啞ではなからうか。外の蟲を聞きながらそんなことを思つてゐるうち、丁度八月初の、土用のある日の夕のことであつた。打水をした庭に向つて夕餉ゆふげの

膳についてゐると、かすれた顛へ聲が、とぎれくゝに三つ四つ聞えた。何の鳴聲とも氣づかずにそのまゝ箸を動かしてゐると、給仕の女が、今のは鈴蟲が鳴いたのではないかしらと言ふ。「鈴蟲にしては餘りに變な聲ではないか」と呟いてゐるうち、又さきのやうな鳴聲が續いて起つた。紛れもなく手洗鉢近くの竹縁に置いた金魚鉢の中からである。すぐさま箸を捨てて鉢の傍へかけつけてみる。確に鈴蟲には違ひない。しかし何といふ不思議な、苦しうな、調子の悪い、吃の蛙みたいな鳴聲であらう。幸に啞ではなかつたけれども、この聲では折角丹誠した甲斐もないと、稍、失望もしたが、それでも、ともかく鳴いてみれば、生れた兒の産聲

にも似て、嬉しいことは流石に嬉しかつた。翌日になると、一番澤山鳴く蟲の聲の調子が、思ひなしか少し直つて樂になつたやうである。と、又昨日のやうな苦しいかすれ聲が、いくつもふえてきた。その翌日には確に鈴蟲の、あの音律の調つた聲が聽かれるやうになつた。かうして日に、あの薄手な銀の鈴を長く、青嵐の中で振るやうな聲が澄渡つて響くやうになつた。三つの鉢では美しい鳴聲が絶えない。それを床の間においたり、縁においたり、又は寢室の蚊帳の裾においたりして、おくと、りんくと鳴く涼しさうな聲が、眞夏の温氣を拂つて、時には深山幽谷にある心地さへする。人の懇望するま

まに二つを分けて、鉢一つを残すことにした。餌が變つて、茄子に蜜をぬつてやる。聲が愈、冴えて、息が長く續く。元より人の手に育てられたのであるから、人の影が見えても、聲音が聞えても、音樂を止めようともしない。屋根の上や築山の上で、精一ばい羽を立てて、羽と羽を打合はすと見ると、子供が大きな聲を振りしぼる時のやうに、突張つた足に力を入れて、體をぐつと前かきみに落す。と、音は愈、澄んだ調子でりんくと冴渡るのである。一つが高く鳴けば、又吾もくと精一ばい根限りに立てた羽を顫はせて、體をがくりと前へおとす。明けても暮れても壺中の天地はたゞ歌三昧の趣があつた。小さい黒い音樂家は三

本の觸角のやうな尾を曳いてゐた。しかし、その中に二本の尾の蟲は、たゞぞろ／＼と鳴く蟲の間々を縫つて、黙りこくつて歩いてゐるばかりである。だんまり屋は雌で、音樂師の方が雄である。前栽に白萩がこぼれ始めた。鳴きに鳴いて、鳴きあかし鳴きくらしした鉢の中の天地にも、秋が來た。流石に季節が終りに近づいたと見えて、聲が前程に元氣がない。音に張裂けるばかりの元氣のないのみか、段々に合奏の數さへ減つて、しまひにはおどろ／＼した聲が、誠に秋のあはれをかこつかのやうに寂しく聞えるやうになつた。さうして秋冷の氣が澄むに従つて、鉢の中には西瓜の種子の音樂師が次

第次第に減じて行つた。逃げるのか知らん。さう思つてゐるうち、いつの間にもやら、りんと、の聲も立たなくなつた。さうしてみすぼらしい土氣色つちけいろの姿が、こそ／＼と硝子鉢の中を音もなく休み勝ちにたゆたひながら廻りあつた。あるひえ／＼とする朝のことであつた。鉢をのぞくと、三本の尾の雌が三匹だけ残つて、あとは影も形もない。しかもその三匹も皆動かなくなつてゐた。雄から追々に食はれて、雄が食ひつくされると、それから弱い雌が食はれて、最後に一番強い、謂はば女王のやうな雌が三つ残つて命數を終へたものらしい。脱いだ自分の着物を食べて成長した蟲は、卵を生んでしまふと、今度は次々に弱い同胞を食べて、

荻原井泉水  
篝火

名は藤吉

明治十七年東京市生

太秦

京都市右京區太秦

廣隆寺

山號は峰岡山

眞言宗古義派の本山

嵯峨

京都市右京區嵯峨町

篝火



生きられるだけ生きたものであらう。三つの屍は庭の一隅に埋めて、上に小さい墓標を立ててやつた。秋から冬、冬から春と、又この鉢をそのまま、日當りにおいて、霧を吹く丹誠が始る。晩春初夏の候に、又例の微粒子の沫のやうな運動が鉢の中に陽炎を作る。今年、孵つた幼蟲の数が去年よりも遙かに多かつた。一握の土の中に一つの世界があるのである。(日中出現)

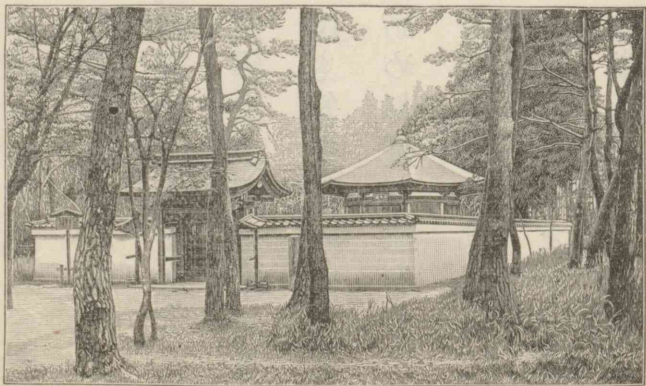
### 一〇牛祭

荻原井泉水

太秦廣隆寺の前で嵯峨行の電車から降りると、宏壯な山門の前には大きな篝火を焚上げ、其の穂先が赤くめらくと

金剛力士  
仁王  
勇力を以て佛法を護  
る神

ゆらめいて、ちぎれて、光を投げるので、金剛力士の像は赫奕と照りはえて動くやうであり、高い屋梁の垂れや彫物なども陽炎うて、殊に其の朱塗の色がほんのりと浮いてゐる。高張提燈があちこちに掲げられ、青年團員が提燈を振つてゐる周圍を、群衆は山門の中になだれこまうとしてゐる。今夜は古例の牛祭なので、私たちが亦それを見に來たのである。



廣隆寺

祭の儀式がはじまるのは夜ふけからだといふ事は聞いて

ゐたが、ともかく私たちも押されてはいつた。廣い境内には、縁日商人が露店を張つて、其の店の間が、自然と人の流れる道になつてゐる。正面のおほきな堂、これが名高い赤堂といふ講堂であらうが、そこは暗い。左手にある金堂には、幔幕を張渡し、電燈の光も明るい中に、澤山の燭を列ね、且其の前の廣場に、齋壇をしつらへ、こゝにも篝を焚いてゐる。堂の上には、講員や來賓らしい人が詰め、舞臺を遠巻きにして、人立ちがしてゐる。祭文を讀むといふ儀式はそこで行はれるに違ひない。しかし、まだ餘程間があるといふことをこゝでも亦聞いたので、一まはり散歩して來ようと、私たちは境内を奥の方へ、そこに松の間に道のついてゐるのを

たよつて、東の方へ足をむけた。其の邊には、祭の群衆はこぼれて居らず、別の處のやうに靜かに、蟲が鳴いてゐた。――池がある、其の水がかんがりと明るく、その岸に立つてゐる松をくつきりと映してゐる。

「あゝ、佳い月だな。」

私は、其の池水の、光に映ずる月夜の美しさに驚いて――今までとても、白い月が空にあることは感じてゐたのであるが――ほつと打たれたやうに、首を擧げて空を見た。松の枝に懸るともなく浮いてゐる――前夜が後の月で――けふは十四日である。私たちは寺の側門を出て、道がなほ東の方へ續いてゐるまゝに、それは多分、花園妙心寺に行く道

後の月  
陰曆九月十三夜の月  
妙心寺  
京都市右京區花園に  
ある名刹  
臨濟宗妙心寺派の本  
山

叡山  
比叡山  
京都の東北方山城近  
江の兩國に跨る山

雙が岡  
京都市右京區花園に  
ある岡  
一座三墳をなし南北  
に相並ぶ  
兼好  
鎌倉室町時代の隱逸  
吉田氏  
正平五年(1100)寂  
年六十八

であらうと思ひながら歩いた。空は何の遮るものもなく、大きく圓く、もう秋も深くなつたことを思はせるやうに藍の色が黒ずんで、一ひらの雲さへもない。地平を見渡すと、まともに叡山がこんもりと据り、それに續いて、東山がなだらかな曲線を連ねてゐる。其の山の裾には薄い夜霧が立つて、京都の灯は其の中に包まれてゐると見える。私は、牛祭の事も忘れて、たゞ此の道をいつまでも歩いてゐたいやうな氣がした。左手に近く、もつちりと小さく茂つた岡がある。

「これが雙が岡ぢやないかしら。」

「兼好が徒然草を著したといふ處ですね。」

「さうだ、月は隈なきをのみ見るものかは。」などと書いてゐたのだらう。」

「西行が、しばしこそ人めづつみにせかれければはては涙やなりたきのかは」といつた鳴瀧も此の邊でせう。」

「其の川が鳴瀧の末かも知れない。」

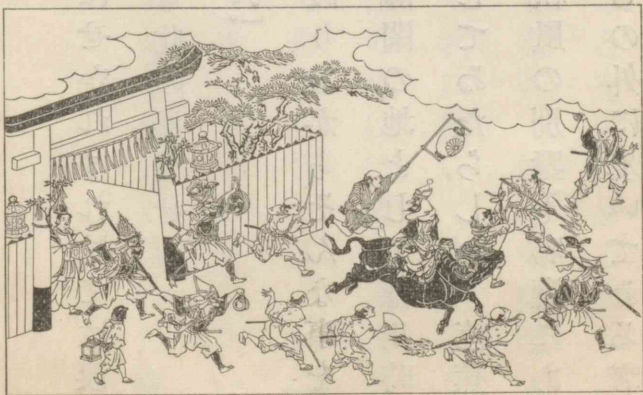
私たちは小さい流に架けた橋を渡りながら、そんな事を話した。なにしろ、此の邊は昔から静閑の地として、徳川時代には、文人墨客が庵を構へる處にしてゐたらしい。芭蕉が旅中に招かれて來たといふ三井秋風の別墅も鳴瀧にあつたのである。その月の道は、私たちの外に歩いてゐる者もないが、向ふから土地の人らしく子供など連れて、太秦の寺

鳴瀧  
京都市右京區雙が岡  
と廣隆寺との間にあ  
る急湍  
御室川の上流

芭蕉  
松尾桃青  
俳聖  
伊賀の人  
元祿七年(1690)歿  
年五十一  
三井秋風  
京都の俳人  
名は時次



の方へやつて来る者もあつた。もう、そろ／＼始るのでせう。私たちも引きかへすことにした。「二體、牛祭といふのは、摩陀羅神といふ靈鬼を祭るための式典なので、摩陀羅神にいでたつた僧が牛に乗り、赤鬼、青鬼の四天王を従へて齋壇にあらはれ、天下安穩、厄病退散等を祈誓する祭文を讀みあげるものださうな。其の時、群衆が「も一つ、も一つ」と叫んで祭文を所望する習慣がある。



祭 牛

それで、

空暗し月やも一つ牛祭

凡 兆

の「も一つ」といふ言葉が出てゐる。又、此の祭の終るのは夜半になるので、

油斷して京へ連なし牛祭

召 波

といふ句もある。などと、問はれるまゝに、私も近頃、始めて本をのぞいて知つた事を受賣のまゝに話したりしながら、寺の横手の道まで来てゐた。

「あなた方、行列を見なさるなら、こゝで待つてゐなさい。一等の佳い場所ぢや。もうぢきにお通りになります。」と土地の者らしいお婆さんが私たちに聲を掛けた。見れ

凡兆  
芭蕉門の俳人  
家の號は春華園  
加賀の人

召波  
燕村門の俳人  
家の號は春泥舎  
京都の人

ば——お寺の練塀の影が黒く伸びてゐる爲に氣が附かなかつたが——皆、土地の人らしい五六人が蹲んで、祭の行列を待つてゐる様子である。で、私たちはそこに立ちどまつて、さて所在なさに、又しても、しみとくと月を仰いだ。月は正しく中天に位して、玲瓏と磨かれてゐる。かういふ夜は、本當に、昔の人の事などが、今の事のやうに懐かしく想はれる。昔、高倉の院に宮仕をしてゐた阿波の局といふ女は貧しくて夏冬の衣更さへ満足には出來ないのを悲しみ、太秦の薬師が如何なる病をも癒して下さるといふので、其の堂に參籠祈願して、「南無大師あはれみ給へ世の中にをりわづらふも病ならずや」と詠じて奉つたところ、薬師から小袖を

高倉の院

第八十代高倉天皇  
養和元年（八四〇）崩  
御壽二十一

賜はるといふ靈夢を見、それから追々幸運に恵まれて、不由のない生活の出來るやうになつたといふ事である。

「世の中にをりわづらふも病ならずや」と、生活苦をも疾病と考へるのは近代的の思想で面白いではないか。其の靈驗のあつた薬師さまの前で、これから摩陀羅神の祈誓の祭文がはじまらうといふのだ。私は月の下にぼつねんと立つて待つてゐる友人に、そんな話もした。見物に來たらしい人が二人ばかり通る。さつきの婆さんは私たちを呼びとめたと同じ様に、其の人にも教へたが、其の人はさつさと境内の方へ行つてしまつた。

「氣の毒なことだ。中へ這入つたら却つてよく見えはし

ないのに……」

婆さんは、道端の石に腰を掛けて、煙草をすばくとすつて  
ゐる。吸殻を土の上にはたいて、又煙管でそれを拾ふが、其の  
小さい火の玉は、月光のべつたりと白く塗られた路に、寶玉  
のやうに赤い。溝のへりに生えた短い雜草は、既に夜の更  
けた露を含んで、いよ／＼青く月の輝きを受けて、みつちり  
とした黒い影を根にもつてゐる。本當に明るい夜である。

「じやらん、じやらん……」

此の時、其の道のずつと遠くて、鏡鉞を軽く打つやうな音が  
聞えて來た。高く捧げた提燈に、「摩陀羅神」「五穀豊登」「國家安  
全」と書いた文字が、幽かに讀み得る位に、その行列は近づい

て來た。私たちは腰をあげて立並んだが、婆さんは、まだ石  
に蹲んだまゝ、もう一服といふ風に、自分の煙管の赤い寶玉  
を愛翫してゐた。(京洛小品)

柳澤淇園  
大和國郡山藩の老臣  
名は里恭

寶曆八年(四八)歿  
年五十三  
伏見  
今の京都市伏見區

一一 土器賣る翁

柳澤 淇園

伏見より、年七十歳ばかりなる老翁、土偶人土器のたぐひを  
擔ひて、洛中を賣りありくあり。常に商ふ家に来りて食事  
をするをりから、その家の奉公人大勢集り、かの翁にいひけ  
るは、「御身の擔ひたるものは、其の價いかばかりの品にか」と  
問へば、答へて「銀十五六匁ほどの荷なるべし」といふ。また  
問ふ、「京の町は人のゆきかひしげき處にて、若し過ちて皆碎

三上參次  
 國史家  
 臨時帝室編修官長  
 東京帝國大學名譽教  
 授  
 文學博士  
 慶應元年(三三三)播磨  
 國生

くまじきものにもあらず、さやうの時はいかゞする。といへば、それは過なれば、さることなしとはいふべからず。さあらん時は、そのことを有りのまゝに陳べて、我等も年久しく商ふなれば、一荷ぐらゐは、情にて借受けて商ひ申すなり。といふ。また問ふ、その上にもまた碎くまじきものにもあらず。その時はまたいかゞする。と詰りいへば、いかに問屋なりとて、數度の無心もいひ難ければ、そのをりには、その許たちの如く奉公なりともいたすより外にせんかたなし。といへり。(雲萍雜誌)

一三 豊臣太閤の文事

三 上 參 次

眞書太閤記  
 三百六十卷  
 作者未詳  
 絢本太閤記  
 八十四卷  
 作者未詳  
 三國志  
 通俗三國志の略  
 七十五卷  
 三國志を演義したものの  
 蜀魏吳爭霸の始末を敘してある  
 漢楚軍談  
 通俗漢楚軍談の略  
 十五卷  
 夢梅軒章峯著  
 漢の劉邦と楚の項羽との爭覇を記述したものの  
 鑽れば愈々堅し  
 類淵明然トシテ嘆ジテ曰ク、之ヲ仰ゲバ彌々高ク、之ヲ鑽レバ彌々堅シ。之ヲ瞻レバ前ニ在リ、忽焉トシテ後ニ在リ。(論語)

從來豊臣太閤の人物事業を世間に紹介したりしは、眞書太閤記繪本太閤記等の書にして、三國志漢楚軍談などと共に普く上下貴賤の間に愛讀せられしのみならず、また講談師の種本ともなりて、文字なき社會にもよく知られたり。然るに、惜しいかな、此等の書には武邊の偉人としての太閤は稍描き出されたれども、其の他の側面は殆ど全く忘却せられたる如く、間、又いみじき誤謬をさへ傳へたり。太閤が無學文盲の人なりと傳へられたるが如き、其の最も著しき例證なるべし。磨けば益光り、鑽れば彌々堅し。眞に偉大なる人物は、子細に研究するに従ひて一層其の光彩を放つものなり。予は今

太田和泉守  
尾張の人  
豊臣秀吉に仕へた  
大村法橋  
播磨の人  
柴田勝家及び秀吉に仕へた  
大政所  
攝政關白の母の稱  
淺野氏  
杉原某の二女  
淺野長勝の養女  
北政所  
淺井氏  
淺井長政の長女  
茶々  
淀君

太閤が一面にては雄才大略の人なりしと同時に、一面には決して無學文盲にあらざりしを斷言し得るを喜ぶ。抑、太閤は一代の事蹟頗る多く、事業の規模甚だ大なり。故に舊大名たりし華族の諸家・古社寺・舊家等に太閤の文書の傳へらるゝもの、其の幾許なるを知らず。公の祐筆たりし太田和泉守・牛一・大村法橋由己等の文章家の手に成りたると思しき、雄健にして生氣に富める文書其の大部分を占めたりとはいへ、確に太閤の自筆なる色紙・短冊・消息の類もまた少しとせず。西に東に遠征せる先より、母なる大政所、夫人なる淺野氏、側室なる淺井氏、若しくは秀頼等に贈りたる書狀の如きは親子・夫婦の間柄の事なれば、もとより祐筆に託す

江村專齋  
儒醫  
名は宗具  
寛文四年(三三)歿  
年百二十  
醍醐  
今の京都市伏見區醍醐  
醍醐寺の所在地

べくもあらず、皆自ら筆を執りたりしなり。書狀に用ひたる文字は大抵平假名にして、書體及び筆力に清婉秀潤等の讚美の辭を加ふることこそ敢へてする能はざれ、頗る圓熟したるものにて、その中自ら峻拔の氣象のあらはるゝを見る。漢字もまた用ひられたるが、其の崩し方も無下に卑しからず、嘗て習字せしことの無き人には、決して能くし得るところに非ざるなり。江村專齋の「老人雜話」に、太閤の祐筆が醍醐の醍の字を忘れて、とみには思ひ出でざりしを、大の字を書けよといひし談を記せるは、太閤の簡易を喜び、敏捷を尙びしをいへるにて、少しも漢字を知らざりしをいへるには非ず。

筆蹟

参りたく候へどもじ  
ゆらくやしきまはり  
へいき候事なり申さ  
ずこゝほどへこし候  
事さへ大まんどころ  
候はん事おもひ候て  
めいわく候ちくせん  
内わづらい心もとな  
く候へばすこしよく  
候よしまんぞくにて  
候  
かしく  
十四日 大かう  
おまあ

小田原在陣  
後陽成天皇の天正十  
八年(三三〇)八月秀吉  
は自ら北條氏政を小  
田原城に攻めた

豊古  
臣文  
秀書  
吉代  
筆鑑

軍陣にての消息などは、咄  
嗟に文章を成したるにて、  
字句の洗煉なしといへど  
も、天真爛漫、辭簡にして意  
達し、少しも凝滞する所な  
し。而して、その間に溢る  
るばかりの愛情現れ、趣味  
の津々たるものあるを覺  
ゆ。天正十八年小田原在  
陣の折、母なる大政所に上  
りし書の中に、そもじさま

は御ゆさん候て、きをもなぐさみ、わか御なり候てたまは  
るべく候。 たのみ申候の語あり。 千言萬語を費すとも、子  
の親に對する愛情は此の「若くなりたまはれ」の一語より適  
切なるものはあらじ。 又その夫人淺野氏への書には、「ねん  
ごろに文給はり、御げんさんのこゝちしてねんごろにみ參  
らせ候。 ことし内にはひまあけ參るべく候。 心安く候べ  
く候。 かならずとし内に参り候て御目にかゝり、つもる御  
物がたり申すべく候。等の句あるなり。 祐筆の手に成りた  
る文書の中にも、かしここゝに太閤の口授に係れりと思は  
るゝ所あり。 固より千軍萬馬の血腥き中に成長したる人  
の習なれば、太閤も多少殺伐粗暴の氣風ありしを免れず。

撥亂反正

亂世ヲ撥メ諸ヲ正ニ  
反スハ、春秋ヨリ近  
キハ莫シ。(公羊傳)

天正十四年  
正親町天皇の御代  
(三四六)

然り撥亂反正の功を奏するには、多少かゝる氣風の必要も  
ありしなるべし。しかも古文書の上より觀察するとき、  
太閤は亦母に孝にして、妻子に愛あり、將卒に對しては最も  
慈悲の念に富みたる善良なる紳士なりしを見る。  
さて太閤の歌は如何に。天正十四年春二月二十八日、太閤  
禁中に伺候しけるに、九重の櫻花今を盛りと咲亂れたるを  
愛でて其の下に徘徊せり。正親町天皇遙かにこれをみそ  
なはしてにや、畏くも勅使を遣はし、花の折枝に一首の御製  
を添へて下し賜ひしかば、太閤感佩に堪へず、即ち  
忍びつゝ霞とともにながめしもあらはれけりな花  
の木のもと

龍安寺  
山號は大雲山  
臨濟宗の名刹  
京都市右京區  
仁和寺の東北

文祿三年  
後陽成天皇の御代  
(三四四)

關屋の花

吉野の山口の六田か  
ら吉野の總門までの  
花

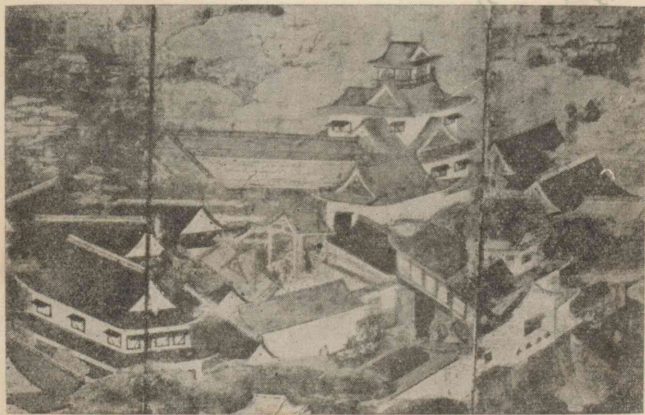
藏王堂  
今の金峯神社  
吉野山中金峯山下に  
ある  
本尊は金剛藏王權現

と返歌を上られき。又十六年の事なりけり、北山に狩して  
龍安寺に憩へることありき。頃しも春の最中なりけるに、  
庭前の枝垂櫻未だ綻びず、却つて淡雪のちらく〜と降來り  
しかば、太閤おもしろく思ひて、  
時ならぬさくらの枝にふる雪は花をおそしとさそ  
ひ來ぬらん  
と詠まれき。感興想ふべし。文祿三年諸大名を率ゐて吉  
野の花見を催されし時、關屋の花の下にては、  
吉野山たれとむるとはなけれど、今宵も花のかけ  
にやどらん  
と詠じ、藏王堂にては、

紀州征伐  
 天正十三年(三四五)秀吉が紀伊の根來寺を攻めた戦  
 玉津島 和歌山市の南四軒  
 名護屋 今の佐賀縣肥前國東松浦郡名護屋村  
 聚樂第 今の京都市上京區中立賣大宮邊に出來た太閤の新邸

歸らじとおもふ家路をいりあひのかねこそ花の恨  
 なりけれ  
 と歌はれたり。巧を弄ばずして  
 なかくに雅趣に富み格調も亦  
 平凡ならずして古の撰集の中にも置きたき心地せらる。

此の他、紀州征伐の時には和歌浦  
 玉津島にて、小田原陣のをりに  
 清見瀉にて、征韓の役には肥前の  
 名護屋などにての詠歌も少から  
 ず。天正十六年の聚樂第への行幸のときは勿論、醍醐の花



聚樂第



土屋補熊藏

醍醐の花見



陣  
 風の急なる日の影にさへ入るるやうゆへかな...  
 中にもうし...  
 せの中...

大佛  
 大閣が建立した京都  
 方廣寺の大佛  
 古英雄  
 魏の曹操

慶長三年  
 後陽成天皇の御代  
 (三五)

に大佛の月に、その折々の歌多く、時としては大宮人の昔を  
 偲ばしめ、又時としては古英雄の横槩賦詩の面影を想はし  
 む。  
 而して功成り名遂げたる此の千古の偉人も亦無常を感じ  
 たる事のありてにや、  
 露とちり雫ときゆる世の中に何とのこれる心なる  
 らん  
 と嘆きしこともありしが、慶長三年八月薨去せらるゝや、あ  
 はれにも、  
 露とおち露と消えにし我が身かななにはのこと  
 夢のまた夢

伊達政宗  
仙臺藩の祖  
寛永十三年(三九六)卒  
年七十

細川忠興  
幽齋藤孝の長子  
關ヶ原役の功によつて豊前四十萬石に封ぜられた  
正保二年(三三〇)卒  
年八十二

淺野長政  
尾張の人安井重繼の子  
淺野長勝の養子  
その室は豊臣秀吉夫人の妹  
豊臣家五奉行の一人  
慶長十五年(三〇〇)卒  
年六十五

新井白石  
名は君美  
江戸時代の學者  
政治家  
享保十年(二八五)卒  
年六十九

文祿の初  
後陽成天皇の文祿元年(三三五)

といふ辭世の短冊をとどめられき。げに太閤は伊達政宗の錚々たる者なりしなり。確に太閤の自筆と認めらるゝ消息若しくは短冊にして、予が原本を目撃したるもののみにも、二三十はあるならん。加之、太閤は、時には學者をして往事を談ぜしめて之を聽き、又禪學の書の講義をも聽きたりき。我が國人が誇るに足るべき此の大偉人は、決して無學文盲ならざりしなり。  
(史學雜誌に據る)

一三 淺野長政

新井白石

文祿の初、朝鮮の事起る。同じき二年六月、長政かの國に渡

石田  
石田三成  
近江國佐和山城主  
豊臣家五奉行の一人  
慶長五年(三〇〇)徳川方と關ヶ原に戦つて敗死した

増田  
増田長盛  
大和國郡山城主  
豊臣家五奉行の一人  
元和元年(三二五)徳川家康の怒に觸れて自双した  
年七十一

晉州  
慶尙南道  
釜山の西八十軒

利家  
前田利家  
加賀藩の祖  
豊臣家五大老の一人  
慶長四年(三五九)薨  
年六十二

氏郷  
蒲生氏郷  
會津城主  
文祿四年(三三五)薨  
年四十



淺野長政

る。石田、増田等と相議し、諸軍勢を率して、晉州城を攻落す。今年、冬、太閤、朝鮮の軍はかゞしからぬを怒つて、徳川殿を始め宗徒の大名を名護屋の陣に集め、朝鮮の軍、今のやうならんには、いつ事定まるべしとも覺えず。今は、秀吉自ら向はんとおもふ。三十萬の勢を三手におし分け、利家、氏郷に大將せさせ、三道より向ひ、朝鮮を討破り、まつすぐに大明に攻入らん。本朝の事、家康さへましませば、心に懸るところなし。方々、いかゞ

思ふ。と仰せあり。 徳川殿御氣色損じて、利家氏郷等に向ひ、  
 「日本の大名多き中に、方々二人選りいだされて一方の大將  
 を賜はらんこと、弓矢取つての面目、何事かこれに過ぎん。  
 抑、家康、苟も弓馬の家に生れ、戦の中に年老いぬ。今この大  
 事に及びて、いかで人々の跡に留つて、徒に本朝を守り候ひ  
 なん。少勢には侍るとも、家康も軍勢を率ゐて、必ず一方の  
 先陣を承るべし。方々の御推舉を仰ぐ所に候。とのたまひ  
 しに、彈正少弼長政進み出で、暫く候、徳川殿。殿下この年月  
 の御振舞、昔の御心とや思し召す。年經る狐の入替つて候  
 を、何事か宣ふべき」と申しも果てぬに、太閤御佩刀に手をか  
 けられ、やあ、秀吉が心に狐の入替つたるいはれ、きつと申せ。

申し損じなば、しや首うち落してくれんず」と責めかけ責め  
 かけ仰せけるに、彈正ちつとも騒がず、長政等が如きは、何百  
 人が首刎ねられんにも、何てふ事か候べき。抑、この年頃由  
 なき軍起して、異國のみにあらず、本朝にも、父を討たせ、子を  
 討たせ、兄弟を失ひ、夫に別れ、妻に離れ、歎き苦しむ者天下に  
 満つ。又それより、兵糧の轉漕、軍勢の賦役、六十餘州が内、悉  
 く荒野となる。今日御參向あらんには、五畿七道の間、竊盜  
 強盜等蜂の如くに起つて、安き心も候まじ。徳川殿いかに  
 思ひ給ふとも、いかでこれを拒ぎて動きなく御跡を守り給  
 ふこと叶ふべき。これらのことを思ひてこそ、先陣とは宣  
 ふらぬ。されば昔の御心ならんには、かほどの事など御心

づきなかるべき。かゝる御心のつかせ給ふこと、これたゞ事にあらず。一定狐の入替つたるには候はずや。賤しき者の諺に、人捕らんとする鼈かめは必ず人に捕らる。』とは、この事にて候ぞ。』と憚る所なく申しければ、太閤、鼈にもせよ、狐にもせよ、おのが主と頼まんものに雑言吐く條奇怪なり。』と、飛びかゝらんとし給ふを、利家氏郷押隔てて、人々御前に伺候せり。長政が首を刎ねられんに御手を下さるゝまでも候はず。そこ罷り申せ、彈正。』といはれて、長政はさらぬ體にもてなし、人々に色代して己が陣に歸り、御使を待つて腹切らんとす。重ねて仰せ出さるゝ旨もなし。

かゝる所に、肥後國に逆徒起りぬ。』と早馬を參らす。太閤大

逆徒  
梅北左内

幸長

長政の長子  
紀伊國和歌山三十七  
萬石に封ぜられた  
慶長十八年(一七三三)卒  
年三十八

本多

本多忠勝  
通稱平八郎  
徳川家康の功臣  
伊勢國桑名十二萬石  
に封ぜられた  
慶長十五年(一七三〇)卒  
年六十三

吉田絃二郎

文學者  
本名は源次郎  
明治十九年佐賀縣生

いに驚き給ひ、徳川殿に御使あつて、長政具して御參りあれ。』と仰せらる。やがて、長政召具せらる。太閤、肥後の國に逆徒起りぬ。汝が嫡子左京大夫幸長追討の使たるべし。』と仰せ下さる。長政大いに悦びぬ。又徳川殿に向ひ給ひ、幸長いまだ年若し、本多を副へて給ふべし。』と仰せらる。やがてかの逆徒、國人等打ちてまゐらす。軍をば出さず。長政仰を承りて肥後國に向ひ、國政を沙汰す。(藩翰譜)

一四 伊豆の松山

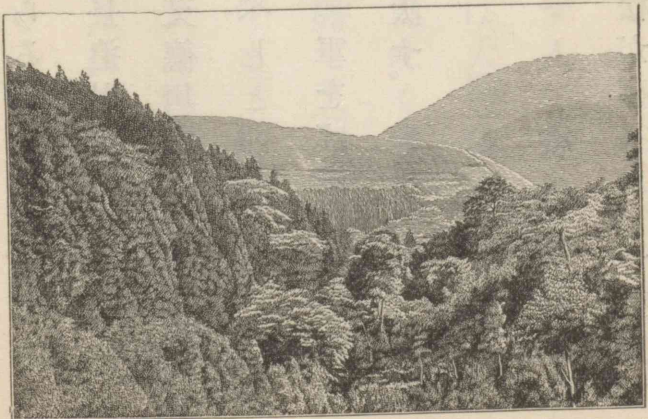
吉田絃二郎

こゝは伊豆の松山。幾十株の赤松が亭々として聳えてゐる。幹は磨き上げたやうに美しく、葉は翡翠よりも青くか

天城  
伊豆半島の中央部に  
峙つ高山

がやいてゐる。長い年月の間天城の風に吹かれ、雪にいた  
められた松の一枝一梢に、柔かな  
味剛き味暢然たる感、爽然たる趣  
を尊きほどに見出す。

毎年私は二度或は三度この山  
に來て、十日或は二十日くらゐづ  
つ赤松の下の小屋に櫓を焚いて  
山を眺めてゐる。この山に來  
始めてから既に十幾年になる。  
しかし、私はかつてこの山の静か  
な小屋の生活に飽くことを知らない。



天 城 山

狭い部屋の中央に爐を切り、櫓をくべながら片手を伸ばせ  
ば、土間の櫓を取ることが出来るやうになつてゐる。松笠  
を拾ひ、落松葉を掻集めて櫓に火をつければ、櫓は音もなく  
燃える。  
狭い部屋は櫓の煙に満たされてしまふが、この頃では煙に  
も馴れてしまつた。  
爐の底の櫓の火ほど静かなものはない。二三寸或は五六  
寸の炎は櫓をなめ、薄暗をなめて、ちろ／＼と燃えては消え  
てゆく。じつと見つめてをれば、私自身の魂までが櫓の炎  
と共に呼吸し、櫓の炎と共に燃え、消えて行くかのやうに思  
はれる。

半日或は終日、私は櫓の火を見つめつゝ、爐のはたに安坐してゐる。炎は何も語らない。けれども私は言葉以上のささやきを感じる。

一日に一人或は二人、時としては柴を負うた馬を追ひつゝ、松山を下つて来る男がある。急ぐともなく、物言ふこともなく、黙々として落葉の山徑を下つて来る。そして、松を隔てて爐のはたの私を見る。

午前十時頃、午後の三時頃、風もなき静かな日には、きまつたやうに頬白の群が松の梢を慕うて鳴きつゝ、飛んで来る。五分、十分と枝から枝を飛び、落葉の上を走り、囀りつゝ、やがて群をなして隣の柴山へ飛んで行く。

頬白も、四十雀も、鴨も、必ず群を作つて飛んで来る。殊に午後の三時頃になつて、日の光が松の間に澄みわたると、櫓を焚きながら、私は今日尋ねて来るであらう小鳥の聲に耳を傾けてゐる。やがて私の豫想を裏切ることなく、昨日と同じ日の蔭、同じ日の光が澄みわたると、有るか無きかの可憐な鳴く音を魁にして、小鳥の群は嬉々として梢に飛んで来る。山中一日の最も賑やかな刹那である。やがて再びあわたししげに呼びかはしながら、夕陽の影を恐れるかのやうに飛んで行つてしまふ。幽かなわびしさが涌く。空山に一鳥も啼かぬ夕暮、ふと、前の赤松山の中に、いかにも單調で、枯淡、寂然たる木を叩く音を聴くことがある。孤獨

啄木鳥



な啄木鳥の木をつゝく音である。  
 私は閑古な啄木鳥の木を叩く音を愛する。  
 黙々として歌はず、鳴かず、空山の寂寞を一つの音にこめて  
 木をつゝく啄木鳥は、歌以上の尊きもの、静かなもの、幽玄な  
 ものを私の胸に響かす。  
 夕暮の薄暗は松山の徑を包み、爐の火に迫る。啄木鳥は尙  
 夕暮の戸を叩く旅人の如く、幽かに木をつゝくことを止め  
 ない。  
 櫓の火を見つめて、物思ふともなく啄木鳥の音に聽入る間  
 に、日は暮れてしまふ。櫓の火は尙燃えて暗をなめ、暗に消  
 える。

たま〜暗を背負うて黙々として松山を下る樵夫と小馬  
 とを夕靄のなかに見出す時、松山の沈靜は更に深く、夕暮は  
 更に暮れて感ずる。  
 松山の小屋の窓には時雨もよく、落葉もよく、雪もよく、霰も  
 よい。

櫓を焚きつゝ窓を通して天城を見、十國峠を見る。たま〜  
 松の一葉の落ちてゆくにすら山の侘しさをこめてゐる。  
 時雨を聽けば、櫓の火は懐かしく、雪に鎖されば、櫓の火は  
 更に懐かしさを募らせて来る。

松の葉をこぼれる程に雪の降るのもよく、落松葉を濕す程  
 に雨の降るのも捨難い。雨も雪も松山の窓の靜寂をたゞ

十國峠  
 日金山の別名  
 箱根の古驛から伊豆  
 の熱海に出る山路の  
 中間にある

深めに深める。雨は落ちたるまゝに窓の下の楮土に吸はれては、音もなき大地に歸りゆく。雪は落ちたるまゝに窓の下の落葉の上に落ち、ためらひ、やがて音もなき大地に還る。私は地に還りゆく雨を見、雪をながめる。そここそ悠久なるものの聲があり、魂の聲があるやうにさへ感ずる。櫓を焚き、櫓の炎に見入る時、私はそこにも悠久の影を感じずる。寂然として限りなきものの聲を感ずる。一鳥啼かず、たゞ私の意識に動きつゝあるものは三四寸の櫓の炎のみである。これこそその刹那の私の世界のすべてである。何といふ古樸な、淡々たる生活意識であらう。

私はたゞ寒い風の吹かないこと、日のあまりに早く暮れはてぬこと、櫓火のいぶらぬこと、たゞそれだけを望む。まだ伐つて日敷を経ぬ櫓は、爐にくべればなま／＼しいその木口からじゝと音して樹脂を吹出す。私は二十幾年ぶりに櫓の木口の濡れて樹脂を吹く幽かな音を聞いた。

(吉田絃二郎詩感想集)

一五 磯邊の小石

相馬御風

私たちの住んでゐる町の海岸は、一帯に美しい小石原になつてゐる。遠くから見ると、白い石ばかりのやうであるが、

相馬御風  
文學者  
名は昌治  
明治十六年新潟縣糸  
魚川町生



その場所に行つて見ると、さまざまの色と形とを持つた小石が混つてゐるのである。私は時々此の波際の小石原を歩いたり、そこに坐つて海に眺め入つたり、又は、そこに寝ころんで空を眺めたりして、かなり長い時間を過すのを私の最も好ましい慰安の一つとしてゐる。

私は又時々そこでさまざまの美しい石を探し歩くことがある。或時は赤い色の石ばかりを集めてみたり、或時は白色の石ばかりを集めてみたり、時には又色の如何によらず、圓い形の石ばかりを探して見たりする。しかも多くの場合、私はそれらの石を家に持歸ることはない。たと探して見るだけである、たと集めて見るだけである。時には集め

ることすらもしないで、一つ拾つては一つ捨て、二つ拾つては二つ捨てるといふ風にしてゐる時もある。

月きよき夜の磯邊をゆきかへり拾ひては捨つ石のいくつを

時には又、何といふことなしに、拾つた石をつぎつぎに静かな海の面に投げて見ることもある。

あづさ弓春の磯邊に今日もかもをさな兒とわれと石なげてあそぶ

をさな兒のなげたる石もわが投げし石もおなじく海に落ちたり

時には又、私はじつと一ところに坐つて、手近にある石を一

つ攫んでは、それを更に一つく、眺めて楽しむこともある。一つく、に、石は形に於ても、大きさに於ても異なつてゐる。二つと同じ石はない。珍しい色や形の石をと探し廻る時には、なかく、さう特色の著しい石はないものだといふやうな氣がするけれども、じつと坐つて數多の石を一つく、に見る時には、一つとして特色のない石はないものだといふ風に、一つく、に心を惹かれるものである。そして、そのうちのどれを特に家へ持歸らうかなどといふ氣は起らないものである。

拾つて楽しみ、探して楽しみ、捨てて楽しみ、投げて楽しみ、眺めて楽しみ、そして最後には、凡てそこに置去りにして來て、聊かの執着も残らない。かうした貴い楽しむ心を私に與へてくれることに對して、私はあの無言の石ころたちに深い感謝を捧げずにはゐられないのである。

石はいつも同じ形をしてゐる。いつも同じ色をしてゐる。しかも、それに對する私の心の變化につれて、又はそれを照らす光の變化につれて、その風情を千變萬化するやうに感じられる。

石は笑ひもする。石は泣いてゐることもある、躍つてゐる時もある。石は怒りもする、考へもする、嘲りもする。

愚庵和尚  
俗名天田五郎  
京都の伏見桃山に庵  
住生活を營んだ  
明治三十七年寂  
年五十一

愚庵和尚は晩年圓い玉を愛し、圓いものを撫でてゐると心が和らいでよいといつてゐたといふことである。良寛和尚は晩年手毬を最も愛してゐたと傳へられてゐる。私も時々さうしたことに倣つて、圓い石を拾つてそれを心ゆくまで撫でて見ることがある。なるほど、圓いものを撫でてゐると不思議に心が和らぐやうな氣がする。しかし、石に自分の肉體の温みに移つた感じは好ましくない。

海岸に坐つて小石を拾つたり捨てたりしてゐても、かなり永い時間を楽しく過すことの出来るのは、感謝すべき事である。

ある。しかも、そんな事をして過した時間は實際よりも随分と永く感ぜられるものである。(野を歩む者)

一六 杉浦重剛翁その一 小笠原長生

杉浦重剛  
教育家  
宮内省御用掛  
日本中學校長  
稱好塾主  
近江國膳所生  
大正十三年卒  
年七十一  
小笠原長生  
海軍中將  
宮中顧問官  
子爵  
慶應三年(二五七)舊唐  
津藩主の家に生れた  
久邇宮邦彦王  
元帥  
陸軍大將  
大勳位  
功四級  
昭和四年薨  
御年五十七  
同妃  
倪子殿下  
公爵島津忠義の第七  
女  
明治十二年御誕生

昭和三年十二月十一日は、私に取つて、何といふ感激の深い日であつたらう。それは外でもない、畏友杉浦重剛翁の墓へ、畏くも久邇宮邦彦王殿下並に同妃殿下が成らせられた御事である。翁として、これ程の光榮がまたとあらうか。私も墓前に於て殿下を迎へ奉つた一人であつた。遺族の人々は申すに及ばず、故人の親友や門下生に至るまで、一人として、その面上に感涙の流れてゐない者は無かつた。ま

ことに、翁の如く、財もほしくない、生命もほしくない人は、普通人の二倍も三倍も感激性の深いものであるから、きのふ兩殿下が墓前にお進み遊ばされた時の英靈の感激は、果してどんなであつたらう。

翁が東宮御學問所御用掛を拜命したのは、大正三年五月二十三日である。これより先四月一日、東宮御學問所職員職制御實施と共に、東郷總裁以下職員の主なる者の任命はあつたが、翁の任命は五十餘日後れた。これは、倫理進講者の人選について、東郷總裁以下銓衡委員が、慎重の上にも慎重に考慮したためであつた。

國士はある、精神家はある、皇漢學者もある、敬神家もある。

東郷總裁

東宮御學問所總裁

鄉平八郎

元帥

海軍大將

大勳位

功一級

伯爵

弘化四年(一五〇七)鹿兒島生

が、そのすべてを具へて、同時に世界の氣勢に通じ、時代の推移を看破する明を有し、科學的知識に富み、自由に外國語を解し、頑固ならず、又輕薄ならずと、かう數へたてて、さて世間



杉浦重剛

を見渡して見よ、果してこれだけの資格を完全に具備した人があるだらうか。先づ無いといつてよい。しかし、無いでは濟まされない。是

が非でも搜し出さねばならぬ。そこで、總裁をはじめ一同額を集めて熟議を凝らした。その結果、唯一人、立派な適任者を發見した。それが杉浦翁なることは、事新しくいふま

猪狩史山

教育家

史學者

名は又藏

日本中學校長

明治六年福島縣生

濱尾男

東宮大夫

名は新

當時は男爵後子爵に

陞敍された

但馬國豐岡生

大正十四年薨

年七十七

松陰神社

吉田松陰を祀つた社

東京市世田谷區世田

谷にある

佐々木侯

侯爵佐々木高行

樞密顧問官

土佐國高知生

明治四十三年薨

年七十

でもない。翁の歿後、私はその門弟で、翁の進講に關して助手の役目を務めてゐた猪狩史山君から、御用掛拜命當時の翁の行動について種々の話を聴き、又、日記の一部をも見せてもらつた。そして今更ながら、翁の誠忠に驚き、思はず泣かされた。翁は東宮大夫の濱尾男から、五月十一日に倫理進講の内談を受ける、と暫時返答の猶豫を請うた。そして、一方では友人門下生等の主なる人々に一々意見を訊ね、一方では靖國神社・松陰神社等に詣で、又、乃木將軍・小村侯・佐々木侯等の墓を展するなど、人間の成し得る限りに於て、お受けすべきや否やの覺悟を練つた。やがて愈、それと決心した際、

數ならぬ身にしあれども今日よりは我が身にあら

ぬ我が身とぞ思ふ

といふ述懐の一首をもつし、且、家人に對してかう言つた。

「杉浦は御學問所の御用の完了するまでは決して死なぬぞ。」

何といふ立派な覺悟であらう。翁は、あのやうな蒲柳の質でありながら、果して八年といふ長い月日の間、殆ど病氣らしい病氣に罹られなかつた。實に人の一念ほど、えらいものはない。さうして、どうだらう。翁は、御學問所の御閉鎖後、幾ばくならずして病床に就き、大正十三年一月二十六日、東宮殿下御成婚の慶典を擧げさせられてから僅かに十八

日を隔てた二月十三日に、永久の眠に就かれた。これ實に果すべきを果し、盡くすべきを盡くした理想的忠臣の終焉として、申分の無いものではあるまいか。

翁が御學問所奉仕の際、東郷總裁は、

「杉浦君は氣で生きてゐるのぢやから、氣に故障を起させないやうにすれば、大丈夫ぢや。」

といつて、翁の健康を保證された。私は總裁の活眼に敬服すると同時に、國士にして始めて國士を解するといふことを一層深く感じたのであつた。

その東郷總裁を、翁の方では、又次のやうに讚歎してゐる。

「現下の日本に於て、東郷さん程な、東宮御學問所總裁とし

ての適任者は、他にあるまい。それは、英雄だとか、勇將だとかいふ點からではない。唯、その終始一貫の誠實からだ。あの毎年の年末年始に行はせられる御終業式と御始業式との際、東郷總裁が御前に進んで、その學年の御成績や、將來に希望し奉る點を言上する時の様子には、つくづく感心させられる。地位、勳功共に高く、しかのみならず、總裁の顯職にゐながら、鞠躬如たるあの態度の、何といふ奥ゆかしい事であらう。御學問所御開始の最初から八年後の御閉鎖の時まで、何時とても東宮殿下に言上するその聲がふるへないことはなかつた。一度あの様子を見聞したら、誰でも、その誠忠に打たれない者は無いで

あらう。榮達して慎み、近づきて狎れない。こんな事は君子でなければとても出来ることではない。私は從來種々の場合に出會つてゐるが、これ程奥ゆかしい感じのしたことはめつたにない。

私は翁の東郷總裁に對する此の批評を移して、これを翁自身の覺悟としても見たいと思ふのである。

一七 杉浦重剛翁その二 小笠原長生

翁の進講は、その範圍の廣かつたこと驚くばかりで、皇道や國體などは申すに及ばず、世界の氣勢、思想の潮流、軍器の發達、宗教の分布、科學の種類、自然界の現象などから、天文地理

山川

物理學者

教育家

名は健次郎

樞密顧問官

東京帝國大學名譽教授

東京學士院會員

理學博士

男爵

會津生

昭和六年薨

年七十八

七情

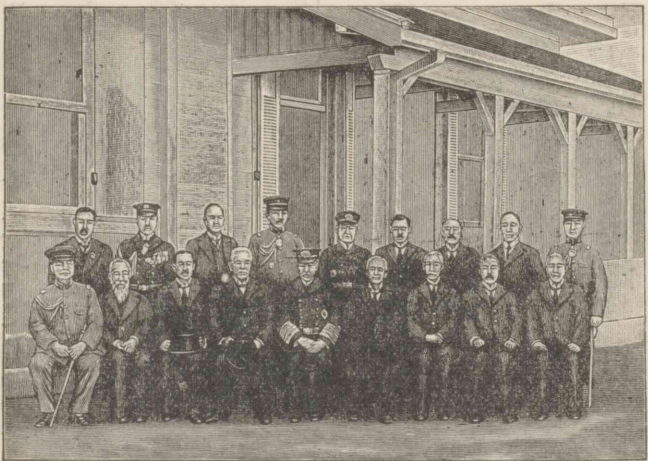
喜怒哀樂愛惡欲

に及び、更に謠曲相撲にまで及んでゐる。さうして、結局は、それらのすべてに對して、帝王の御覺悟は、かくあらせられますやうにと結ぶのを常としてゐた。それも、進講する各種の事を、それ〴〵斯道の權威者について徹底的に研究してから申し上げるのだから、なか〴〵容易なことではない。東郷總裁の兩翼となつて御學問所に奉仕した濱尾山川の兩老も、翁の進講ぶりに満足して、

「これでやつと安心した。」

と、覺えず笑みを漏らした。要するに、杉浦翁は、口と共に心を以て進講した。心と共に身を以て進講した。翁は、これが爲に、如何に人間としての七情と苦闘を續けられた事だ

前例右より  
 吉江御用掛  
 白鳥御用掛  
 清水御用掛  
 山川評議員  
 東郷總裁  
 濱尾副總裁  
 入江御用掛  
 杉浦御用掛  
 宇垣評議員  
 後例右より  
 加藤御用掛  
 瀧御用掛  
 飯島御用掛  
 土屋御用掛  
 小笠原幹事  
 壬生御用掛  
 山崎御用掛  
 山本御用掛  
 和田御用掛



「莊嚴にして雄大なる君徳をば、御参考となるべき古今東

東宮御學問所職員  
 佛陀の修行にもをさく、劣  
 りはせぬ。随つて、そこには  
 杉浦も無い、肉身も無い。た  
 だ純なる日本臣道が、人間の  
 姿を借りて現れてゐるのみ  
 である。かくして、東宮殿下  
 の御徳は、翁の啓沃によつて  
 日に月にその御光を添へさ  
 せられたのであつた。

西の格言及び實例につきて御進講申し上げるに、嘗に善  
 くその要領を御會得遊ばさるゝのみならず、御自發の御  
 見識の高邁にわたらせらるゝこと、只管欽仰の外なし。  
 身常侍の職にあらざるを以て、御平素を詳知する能はず  
 と雖も、觀察の及ぶ限りに於ては、一々御實行遊ばさるゝ  
 を見るなり。不肖三十八年間高等普通教育に従事し、萬  
 を以て數ふべき天下の英才に接觸したれども、未だ曾て  
 見ざる所の御性格なり。」

これは、大正八年四月二十九日、東宮殿下滿十八歳に達し給  
 ひ、同年五月七日賢所大前に於て御成年式を執行はせられ  
 た當日、杉浦御用掛が公表した謹話で、その感激の狀が、言外



に溢れてゐる。

月日は流れて、御修學年限たる七年はいつしか經過し、殿下には、大正十年二月十二日を以て、御豫定の全科を御修了あ

筆蹟

東風歳ト一番新ナリ。  
我獨リ孤清猶貧ヲ守  
ル。頼ニ床頭ノ四君  
子有リ。悠然迎ヘ得  
タリ古稀ノ春。  
甲子新年口占  
天台道士

東風與歳一番新我獨孤清猶守貧  
頼有床頭四君子悠然迎得古稀春

甲子新年口占

天台道士

筆 剛 重 浦 杉

らせられ、同十八日、いとも嚴肅に御修了式を擧げさせられた。その御式場における東郷總裁の言上は、言々句句莊重を極めたが、畏くも御傾聽の體を拜したので、參列諸員は何れも無限の感に打たれた。別けても、杉浦御用掛は兩眼に

涙を湛へて、頭を垂れてしまつた。

同御用掛の倫理進講度数は、前後合して實に二百八十一回に及び、これに關して手記した材料の稿本は、積みせば鴨居に達するであらう。

御修了式後四日を経たる二月二十一日午前十一時四十分、東宮殿下には、東郷總裁以下御學問所職員一同に拜謁仰付けられ、左の令旨を賜はつた。

今回御學問所の學業滞りなく修了し、誠に喜ぶ。數年間、總裁以下職員一同の懇篤なる勤勞を深く謝す。洵に恐多き極みで、一同感激に堪へなかつた。それから數日の後であつた。私は、御學問所においていろ

淀橋  
東京市淀橋區淀橋

いろと翁の指導を受け、殆ど先生として仰いでゐたので、その謝意を表し、旁、記念の字でも書いて貰はうと思つて、例の如く淀橋なる日本中學の校長室を訪問した。すると、事務員が私を迎へて、

「先生は少々風邪の氣味で、今日は出勤されません。」

といふことであつたから、それでは、どんな様子か、私邸に往つて見ようと、すぐ側のお宅を尋ねた。すると、顔馴染の書生さんが出て來て、來意を聴き、奥にはいつたが、やがて再び現れて、

「失禮ながら病室でお目に懸るさうですから、お通り下さ

す。」

と告げた。よつて、書生さんの後に續いて病室に入つて見ると、翁は床の上に起直つてゐて、「やあ」と平素の如く元氣な聲で呼びかけられた。が、どうも顔色が良くない。そこで、一應の挨拶が済んでから、

「もう病つたんですか、あまり現金ですね。」

と冗談半分にいふと、翁は強ひて笑顔を作つて、

「なに、たいした事ぢやありません。ほんの鼻風邪です。」

しかし、小笠原さん、色々お世話になつたが、重大な御奉公が済んで、御同様こんな有難い事はないですな。杉浦など、御指導申し上げたなどは以ての外で、始終御指導を仰いでゐるやうな氣がしてね。唯もう戦々兢兢と、寢て

高輪  
芝區の高輪御殿  
當時東宮御所であつた

も覺めても……だが、恐れながら満點以上であらせられるので、杉浦も始めてどうやら及第したやうな安心を感じましたよ。

といつて、遙かに高輪の方に向ひ拜伏された。やゝあつて、翁は腕をまくつて私の前に出し、

「これを見て下さい。」

といはれた。あゝ、その腕は本當に骨と皮ばかりで、握つて見ると、肘の邊でも私の指で樂に廻り、しかも、氷のやうに冷たかつた。私はこれを離すに忍びず、握つたまゝ、じつと翁を見つめた。翁は眼を塞いだ。(思ひ出を語る)

一八 樹の根

和辻哲郎

和辻哲郎  
哲學者  
京都帝國大學教授  
文學博士  
明治二十二年兵庫縣生

松の樹に囲まれた家の中に住んでゐながら、松の樹の根が地中でどうなつてゐるかは餘り考へて見たことがなかつた。美しい赤褐色の幹や、わりに色の浅い清らかな緑の葉が永い馴染である松の樹の全體であるやうな氣持がしてゐた。雨が降ると、幹の色はしつとりと落ちついた、潤ひのある鮮かさを見せる。緑の葉は涙に濡れたやうなしをらしい色艶を増して来る。雨のあとで太陽が輝き出すと、早朝のやうな爽やかな氣分が、樹の色や光の中に漂うて、いかにも朗かな生の喜がそこに躍つてゐるやうに感ぜられる。

——それが私の親しい松の樹であつた。

然るに、或時私は松の樹の生ひ育つた小高い砂山を崩して  
ゐる處にゐて、砂の中に喰込んだ複雑な根を見ることが  
出來た。地上と地下との姿が何とひどく相違してゐるこ  
とだらう。一本の幹と、簡素に並んだ枝と、楽しさうに葉先  
を揃へた針葉と、——それに比べて、地下の根は、戦ひ、もがき、  
苦しみ、精一杯の努力を盡くしたやうに、枝から枝と分れて、  
亂れた女の髪 of 如く、地上の枝幹の總量よりも多いと思は  
れる太い根、細い根の無數を以て、一齊に大地に抱きついて  
ゐる。私はこの様な根が地下にあることを知つては、  
併しそれを目の前にまざく——と見た時には、思はず驚異の  
情に打たれぬわけには行かなかつた。私は永い馴染の間

に、このやうな地下の苦しみが不斷に彼らにあることを、一  
度も自分の心臓で感じたことがなかつたのである。彼の  
苦しみの聲を聞いたのは、時折に吹く烈風の際であつた。  
彼の苦しきさうな顔を見たのは、濕りのない炎熱の日が一月  
以上も續いた後であつた。しかし、その叫び聲や萎れた顔  
も、その時さへ過ぎれば、すぐにもとの快活に歸つて、苦しみ  
の痕をめつたにあとへ残さな。しかも彼らは、我々の目  
に秘められた地下の營みを、一日も怠つたことがないので  
あつた。あの美しい幹も葉も、五月の風に吹かれて飛ぶ緑  
の花粉も、實はこのやうな苦勞の上にもみ可能なのであつ  
た。

この時以來、私は松の樹のみならず、あらゆる植物に心から

親しみを感じるやうになつた。

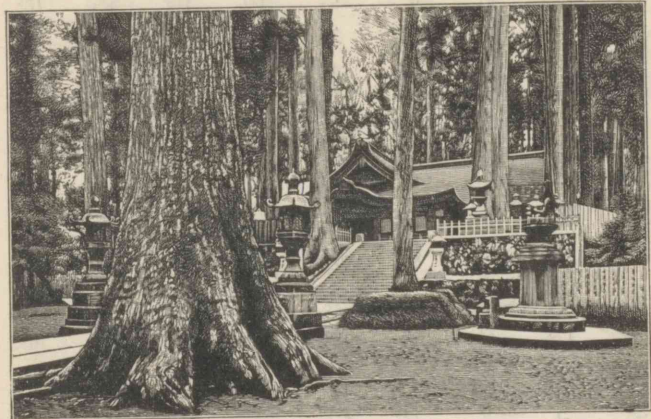
彼らは我々と共に生きてゐる

のである。それは誰でも知つ

てゐる事だが、私には新しい事

實としか思へなかつた。

高野山の繪



私は高野山へ登つた、さうして不動坂にさしかゝつた時に、數知れず並んでゐるあの太い

檜の木から、何とも言へぬ莊嚴な心持を押しつけられた。

なるほどこれは靈山だと思はずにはゐられなかつた。こ

の地をえらんだ弘法大師の見識にもつくづく敬服するや

うな氣持になつた。

それは外郭に連なる山々によつて、平野から切離された、急

峻な山の斜面である。幾世紀を経て來たか分らない老樹

たちは、金剛不壞といふ言葉に似つかはしいほどな、どつし

りとした、迷のない、壯大な力強さを以て天を直指して直立

してゐる。さうして樹々の間に漂うてゐる生々の氣は、ひ

たひたと人間の肌にも迫つて來る。私は底力のある興奮

を心の奥底に感じ始めた。

私の眼はすぐに老樹の根に向つた。地下の烈しい營みは

高野山

和歌山縣伊都郡にある名山

弘仁七年(四七六)空海は此の山を相して金剛峯寺を建てた

不動坂

京口即ち京都方面の登山口から登り四軒の坂その上に不動堂がある

弘法大師

眞言宗の開祖

空海

讃岐の人

承和二年(四九五)寂年六十二

金剛不壞

金剛は金屬中の最も剛堅なるもの佛の身を金剛不壞の身などといふ

既に地上一尺のところ明らかに現れてゐる。土の層の深くないらしいこの山に育つて、あの亭々たる巨幹を支へる爲に、太い強靱な根は力のかぎり四方へひろがつて、地下の岩にしつかりと抱きついてゐるらしい。あの巨大な樹身にふさはしい根は、一體どんなであらう。殊に相隣つた樹の根と入りまじつて、薄い地の層の間に複雑にからみ合つてゐる有様は、たとへ想像するだけでも、我々に驚異の情を起させる。たしかにはげしい生の力の營みによつて、残るところなく包まれてゐるのである。我々はそれを肉眼によつて見ることは出来なかつたが、しかし一種の靈氣として感ずることは出来た。隠れた努力の威壓が、神祕の影を

さへ帯びて、我々に敬虔の情を起させずにはゐなかつたのである。

私は老樹の前に根の浅い自分を恥ぢた。さうして地下の營みに没頭することを自分に誓つた。今氣づいてもまだ遅くはない。まづその根を確におろさなくてはな成長を欲するものは、まづその根を確におろさなくてはならぬ。上に伸びることをのみ欲するな。まづ下に喰入ることを努めよ。

早年にして成長のとまる人がある。根をおろそかにしたからである。

四十に近づいて急に美しい花を開き、豊かな果實を結ぶ人がある。下に喰入る事に没頭してゐたからである。

私の知人にも、理解のいゝ頭と、感激の強い心臓と、よく立つ筆とを持ちながら、まるで勞作を發表しようとしなない人がある。彼は今生きることの苦しさに壓倒されて、自分のやうなものは生きる値打がないとさへ思つてゐる。しかしそれは彼の根が一つの地殻に突當つて、それを突破する努力に悩んでゐるからである。やがてその突破が實現された時に、どのやうな飛躍が彼の上に起るか。——私は彼の前途を信じてゐる。根の確な人から貧弱な果實が生れる筈はない。

古來の偉人には雄大な根の營みがあつた。その故に、彼らの仕事は味はへば味はふほど深い味を示して來る。現代には、たとへ根に對する注意が缺けてゐないにしても、ともすればそれが小さい植木鉢のなかの仕事に墮してゐはしないか。いかにすれば珍しい變種が出来るだらうかとか、いかにすれば豫定の時日の間に註文通りの果實を結ぶだらうかとか、すべてがあまりに人工的である。限られた土壤の中で、繊細に發達した根は、深い大地に移されても、

自由にその手足を伸ばすことが出来ない。天を衝かうとするやうな大きな願望は、いぢけた根からは生れる筈がない。偉大なものに對する崇敬は、また偉大な根に對する崇敬であることを考へて見なければならぬ。(偶像再興)

吉江孤雁

佛文學者

名は喬松

早稻田大學教授

文學博士

明治十三年長野縣生

一九冬の姿

吉江孤雁

夏の華やかな姿が亂れて、動亂はてしなき雲と霧との中に、今年は秋雨が長く續いた。時雨の寂しさを味はふよりは、雨霧の室内へ舞入つて來る寂しい中に、秋が過ぎた。秋の末から初冬へかけての空は、星の姿の無數に美しいの

を仰ぎ見るに最も好い。私は都會に人となつた友人の二人に、星の美しさを話すと、案外な面持で「星はそんなに美しいものだらうかしら」と頭をかたぶけてゐた。靜かに空を仰いで見る暇もない、都會生活の忙しい中に人となつた此の友人等には、星の美は、つひに問題になつてゐなかつたのだ。

見渡すはての眼界を遮つて、此等の人たちの眼に映り胸にしみ入る夜の光は、山國の冬の夜に、上から鋭く射して來る星の光ではない。紅か、緑か、紫か、黄か、さまざまな球燈、若しくは廣告燈の光なのだ。私が一人で書齋に籠つて、小さなランプの下で、夜ふけの寒

Lamp  
ランプ  
洋燈



さのひし／＼身に迫つて來る時、瞑目して思ひだすのは、濃い黒い山影を前にして、枯田の先からつゞく松林の一層黒い長い姿を見ながら、山頂に近く仰ぎ見た星の光である。ざら／＼光るするどい星の光、その光は、私の頭の中までも、胸の奥までもしみこみ、忍び入つて、その底で冷たい光を放つてゐるやうに思はれる。

すつきりした氣分で、何物でも頭の中の奥深く映すやうな透徹つた心持で眺めやつた星の光は、到底都會生活の中からは得て來られない賜である。私は近い中に、友人と一緒に天文臺へ行つて、冬の夜の紫紺の空を繞つて行く木星を見る約束をしてゐる。深奥な果なき空を背景に、白く光る

リング  
環

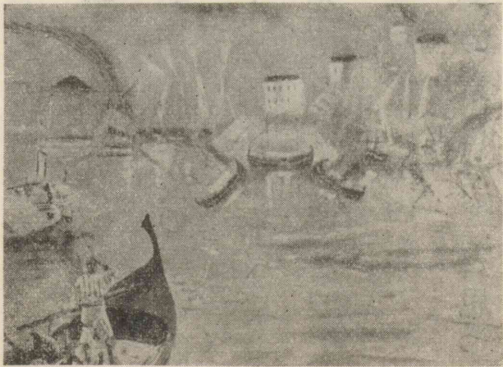
リングを繞らした木星の光は、深く／＼私の胸へさしこむことだらうと思つてゐる。

此の間或友人が來て、暖い南國の空で、ごく小さな時分に、仰いで見た蜃氣樓の姿を話してくれた。小學校の頃、教師に連れられて同級の者と一緒に遠足した時、ふと行く手に當つて、高い山の頂を越えて、其の先の空に、白帆の連なつて行く眞青な海を望み見た。

海だ、海だ、自分等の行くべきはての海の景色だ。と思つて、其の山の麓を繞つて、目的の海濱へ出て見ると、さつき見た海とは全然違つた海であつた。では、さつき見た海は何處

砲兵工廠  
今は陸軍造兵廠といふ  
小石川區小石川町に  
ある宏大な工廠

の海であらう。空に高く、何處かの海が白帆と共に其の景色を浮べたのだ。——此の蜃氣樓の海が、ふと、此の間一人下宿屋の窓によつて、砲兵工廠の森に靡く煙を見て立つてゐると、その先の方へ、遠く雲切れがして、細く、長く、覗いてゐる青空の中に浮んで來た。忘れてゐた十餘年前の蜃氣樓の海！其の友人の胸は踊つた。窓下を通つて行く喧騒な車馬の響も忘れて、長く其の空を望んでゐた。



伊太利メッシーナ港の蜃氣樓

冬の寒さは、其の冷たい重くるしい空氣の中を通つて行く

人々に、自分の身の存在を深く思はせる。その冷たい空氣を、一步々々押通つて行く時、言ひしらない男らしい感じを胸に涌かしめる。その體には力が行渡る。思はず潤歩して其の寒さと戦ふ氣が起つて來る。——巷路を走つて行く犬の後影を見送つてもさうだ。彼等の走るにも、夏の夜などとは違つて、元氣がある。彼等の胸は高く張る。吠える聲は澄んで、遠くまで響く。自然の寒さの壓迫に對しては、人も、犬も、思はず力を出して反抗せずにはゐられないものと見える。

私は夏の華やかな緑の色にも生の伸びやかさを思はせら

れるが、冬の嚴肅な男らしい姿には一層の力強さを感じしめられる。(自然の沈黙)

二〇 雪

堀口大學

堀口大學  
詩人  
明治二十五年東京市  
生

雪は降る！ 雪は降る！  
見よかし、天の祭なり！  
空なる神の殿堂に  
冬の祭ぞ闌たひなほなる！  
たえまなく雪は降る。

鶉



をどれかし鶉つぐみらよ！  
うたへかし、鶉ら。  
降る雪の白さの中にて！  
いと聖く雪は降る。  
沈黙のうちに散る花瓣！  
雪はしとやかに  
踊りつゝ地上またに來る。

雪は降る！ 雪は降る！

白き翼の聖天使！

我等が庭に、身のまはりに、

さゝやき、歌ひ、雪は降る！

降り來るは惠の麵麩なり！

小さき白き雪の足！

地上にも、屋根の上にも、

いと白く雪は降る！

冬の花弁の雪は降る！

地上の子等の祭なり！ (詩集—月光とピエロ)

### 二一 東國武士 萩野由之

武勇な氣風の盛な時代には、何處の國にも決闘がはやつた。決闘とは命がけの喧嘩である。人の生命は君國の爲にこそ毛よりも軽いが、個人同志の意地張の爲にあたら生命を棄てるのは愚の至である。尤も卑怯の舉動をなし、臆病者となり果てるよりは、ましてあらうが、畢竟は血氣の勇にはやる結果だから、賛成が出来ない。

萩野由之  
國史家  
東京帝國大學名譽教  
授  
文學博士  
佐渡國相川生  
大正十三年薨  
年六十四

とはいへ、日本の平安朝時代に於て、この決闘が或種の人々の間に行はれた事は面白い。殊に平安朝時代は、京都の方面には、髯のある堂々たる男子が女の眞似をするやうな弱弱しい氣風が漲つてゐた時代であるのに、關東方面の一部に此の氣風があつた事が面白いのである。

そして此の氣風が練れに練れて遂に弱々しい元氣の無くなつた日本を改造して、氣骨のある新日本を現出した事に思ひ到れば、又頼しい所がある。今こゝに其の決闘の顛末を語らう。

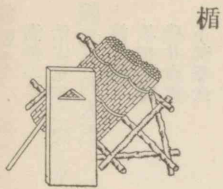


源頼朝

源頼朝  
 満仲の子  
 治安元年(六六〇)卒  
 頼光の四天王  
 渡邊綱  
 坂田金時  
 碓井貞道  
 下部季武

武藏國に箕田源二源宛よつといふ者があつた。これはかの有名な武將源頼光の四天王の一人といはれ、又羅城門の鬼を斬つたと言傳へられてゐる渡邊綱の父である。又、下總國に村岡五郎平良文といふ者があつた。これも四天王の一人碓井貞道の父である。兩人とも武勇の譽の高かつた人で、共に東國に居る所から、互に武勇に於て劣るまいと、常々競争してゐたのであつた。

然るに箕田の家來の中におしやべりの奴があつて村岡に向ひ、私の主人はあなたを侮つて、村岡が如何に勇氣があらうとも、とても自分に手向ひのなることではない。といつてゐます。と告げたから、たまらない。良文の方でも、だまつて



楯

はゐらない。「箕田殿の腕前は此方も知つてゐる。さやうに思はれるなら、然るべき野原をえらんで決闘しませう」と箕田へ申し込んだ。かく申し込まれては、箕田源二も否應はない。「宜しい。承知しました」と、日は何日、場所はしかくの處とまで約束が成立した。

約束の期日は來た。雙方共に部下の人數五六百人ばかりを従へて、所定の野原へ到着したのが、かれこれ午前十時であつた。兩陣の間隔は約百米ばかり。雙方共に主人のため、身に捨て命を惜しまぬ血氣の青年、一列に楯を突きわたして陣所を固めた。

かゝる場所には、先づ雙方から兵士を出して決闘開始の申



雁股の矢  
矢尻が二股になつてゐる矢

合をなし、其の兵士が各の陣に歸る時に、雙方から矢を射かけるのが例で、その矢の飛ぶ中を、馬をかけさせず、見返りもせず、静々と我が陣所へ引返すのがえらい事になつてゐる。そして後に兩陣から矢を放つのを射組むといつて、これを開戦の式とするのである。

然るに良文は此の開戦の初に使を宛に遣はして、「今日の決闘は、平常するやうに射組むことは面白くない。君と我が輩とが各の手腕を試みる爲であるのだから、唯二人だけで馬を乗出して、腕の限り射ようではないか」と申し送つた。

宛は「いかにも同感でござる」といつて、唯一騎陣所を離れて乗出し、雁股の矢を番へて突立つた。良文はこれを見て大

いに喜び、家來共に向ひ、「貴様たちは見物してゐよ。我が輩が射落されたならば、その時は死骸を取片附けよ」と言捨てて、これも唯一騎雁股を執つて走らせあつた。最初の矢は雙方共に中らなかつた。二度目の矢をば必ず當てようとは互に思つてゐたが、何さま名人と名人との手合はせてあるから、良文の放つた矢は、宛が馬を馳せちがへてこれを避ける、宛が放つ矢をも、良文はうまく避けて中てさせない。三度目には、今度こそと、互に敵の胸板目がけて放つた。敵は馬から落ちるやうにして矢を避けたから、良文の矢は宛の太刀の股寄ももの處へ中つたばかりで、からだには些の傷もつかなかつたし、宛の矢も良文の腰當こしに中つたばかりで、か

股寄  
雨覆ひ  
腰當  
箆の倒れぬやうに上  
からしめる帯  
上帯ともいふ

らだには達しなかつた。

こゝに於て良文は宛にむかひ、お互に射る矢は決してそれる矢ではござらぬ。もはや互の手練の程は見えた。のみならず、此の決闘は意趣遺恨といふのでなくて、たゞ一時の意地張からのことであれば、お互に殺しあふにも及ばぬこととでござる。なんと決闘はこれでやめようではござらぬか。といつた。すると、宛は早速これに同意して、「我が輩ともさやうでござる。最早お互の手腕は明白でござる。いざ引返さう」といつて決闘をやめた。

これを見てゐた雙方の兵士は皆太息をつきつ、「我が主人たちの馳組んで射合はれる所を見ては、今は射落されるか、

今は射落されるかと思ふと、ひやくして氣も心も顛倒し、自分が決闘して生死を賭するよりは却つて恐しかつたと、胸なでおろして語り合つた。

此の決闘の後、宛と良文とは互に仲善しになつた。以前よりも懇意になつたのである。兩人がかゝる動機から懇意になつたので、其の子の綱も貞道も共に源頼光に従つてその部下となり、相共に四天王の中に數へられるやうになつたのであらう。頼光が市原野に兇賊鬼童丸を退治した時も、綱と貞道とは共に従つてゐたのである。要するに此の頃の決闘は實に堂々たるもので、少しも卑怯な眞似をせず、如何にも男らしくやつたものだ。

市原野  
古の櫛原郷  
今の京都市右京區松尾

伊達政宗  
仙臺藩の祖  
寛永十三年(三三〇)卒  
年七十

湯淺常山  
江戸時代の儒者  
名は元禎  
岡山藩士

會津征伐  
天明元年(四四一)歿  
年七十四

慶長五年(三六〇)五月  
徳川家康が會津の上  
杉景勝を征伐した戦

白河  
福島縣磐城國西白河  
郡白河町

白石  
宮城縣磐城國刈田郡  
白石町

磐城  
福島縣磐城國磐城郡  
平町

相馬  
福島縣磐城國相馬郡  
中村町

義理を重んじた我が國特有の武士道も、こんな所から次第に發達して來たものであらう。(史話と文話)

### 二二 伊達政宗

湯淺常山

會津征伐の御時、伊達左京大夫政宗は急ぎ本國に歸り、搦手より攻入るべき由仰を承り、大阪を打立つて夜を日に繼ぎて馳下る。白河より白石<sup>しろし</sup>まで皆敵の中なれば、道塞がりぬ。常陸國を廻りて、磐城・相馬にさしかゝつて國に歸らんとするに、相馬また累代の仇なり。然るに政宗僅かに五十騎ばかり引具して常州を經、磐城と相馬との境に到り、まづ相馬が許に使を立て、此の度徳川殿上杉を征伐し給ふにより、政



義胤  
盛胤の子  
相馬領主  
寛永十一年(三五四)卒  
年八十八

宗搦手より向ふべき由の仰を承りぬ。路既に塞がり候ひし程に、やうく此の城に馳着きぬ。餘りに早めて道を打ちし故疲れ候。願はくは城下に旅館を賜はらばや。馬の足休めて明日國に歸り入らんと存ず。と言はせたり。相馬長門守義胤之を聞き、あつばれ運の盡きたる事ぞかし。さらぬだに、伊達は相馬が年頃の敵なり。ましてや味方討たん一方の大將承りたりと言ふものを。いでく今宵一夜討して、案内知らぬ奴ばらを一人も残らず討取つて、年頃の仇に報い、又今度の賞にも預らばや。とて、やがて民家をしつらひて迎へ入れ、人々集めて夜討の評定したりけり。爰に水谷三郎兵衛といふ者遙かの末座に候ひけるが、進み

窮鳥懐に入る  
窮鳥懐ニ入ルハ仁人ノ憫ム所。  
(頼氏家訓)

駒ヶ嶺  
福島縣磐城國相馬郡  
駒ヶ嶺村  
中村町の北約八軒  
仙臺市の南約七十二  
軒  
もと仙臺領

出で、末座の異見恐入つて候へども、既に會議の座に列なりて候へば、所存を残すべきに非ず。抑、窮鳥懐に入る時は獵者も之を殺さず。とこそ申し候へ。政宗程の大將、年頃の怨



伊達松島瑞藏  
政宗政藏

を棄てて君を頼みて來りしを、たばかりて闇々と討たれんこと、勇者の本意にあらず。永き弓箭の瑕瑾ならずや。又彼が國境駒

ヶ嶺に到らんに、行程僅かに二里、けふ日未だ未の時にさगरらず。政宗が國に入らんとだに思はば、日夕ならざるに到るべし。それに僅かの勢にて留ること、深き慮あらざらん

や。只此の度はよきに警固して國に還し、重ねて戦に臨まん日、勝敗を天運に任せらるべきにや」と申しければ、一座の人々此の議に同じ、兵糧秣藁鹽魚に至るまで積置き、篝火を焚きて夜廻す。義胤が士ども、「政宗餘りに静まり返りたる體こそ心憎けれ。いざ試みん」とて、夜更けて後、馬二匹取放ち、人々走り散りて以ての外に騒ぎのゝしる。政宗小童一人に燭持たせ、白き小袖を上に打掛け、左の手に刀を提げて立出で、「相馬殿の御人や候」と言ふ。「是に候」とて行向へば、物音高く候。政宗が下人ばら狼藉候はんには、よく静めて給はり候へ」とて、又内にぞ入りたりける。夜明けけれども立ちもやらず、巳の時ばかりになりて、義胤のもとに使して一

上杉  
上杉景勝

石田  
石田三成

禮し、さてしづめて馬を打つて行く。竊かに人をつけて窺はしむるに、かの國の境駒ヶ嶺のあなたに、伊達家の軍兵雲霞の如く充滿ちて出迎へぬ。かくて關ヶ原の事終りて、相馬既に上杉に心合はせられたれば、亡ぶべきに極る。政宗訴へ申されしは、相馬は年頃政宗が敵なり。石田上杉に與したるが一定ならんには、政宗彼が爲に討たれしなるべし。然るに君の仰承りて馳下るよしを聞いて、深き怨を忘れ、新恩を施しき。彼が逆謀にあらざるの證に候はずや。又累代の弓箭の家永く斷たれんこと不便の至なり」と度々嘆き申されしかば、後には本領を相馬に賜ひけりとぞ聞えし。(常山紀談)

浦鹽

シベリヤ東部の

Vladivostok

太田覺眠

西本願寺派の僧  
慶應二年(三三)伊勢  
國四日市生

川上事務官

時の貿易事務官川上

俊彦

莫斯科總領事

南滿洲鐵道株式會社

理事

文久元年(三三)江戸

生

二三 浦鹽より

太田 覺眠

拜啓野衲は川上事務官と共に最後の引揚  
船にて歸朝致すべき旨申上置候處西比利  
亞内地奥深く入込み居る同胞は諸河結氷  
のため水路の交通全く斷絶致居候今日如何  
なる手段を取るも引揚船出帆の期日迄に  
當港へ到着の見込到底これなく幾百の同胞  
は餘儀なく殘留する事に相成申候今後全

く本國の保護を離れて心細く敵國內に殘留  
する同胞の心情を察する時は野衲は如何に  
してもこの憐むべき同胞を棄てて歸朝するに  
忍びず斷然敵國內に踏留る事に決心致候  
野衲がこの事を事務官に申出でたる時事務  
官は野衲の行為を以て政府の命令に背くも  
のなりとし色を作して止められたり且曰く  
君は露國政府の保護に安んぜんとするかと  
野衲曰く予は露國の保護に安んずるものに

ありずその危険に甘んぜんとするものなり今や  
貴官は居留民が唯一の頼みとする帝國の國旗を  
收めて此の地を引拂はんとす今後殘留の同  
胞はそれ誰をか頼まん予は身僧侶として此  
の人々の境遇を見つゝ船に上ること能はず固よ  
り死は疾くに覺悟せりと事務官は突然起  
つて野衲の手を執つて曰く予は最早君の志  
を沮止せざるべし予は國民に代つて君の高義  
を感謝す予は我が政府に對し君一人を見殺

にする責は甘んじて之を受けん君乞ふ佛陀の  
大悲を發揮せよと相對して思はず感涙に咽ぶ  
やあつて曰く前程遼遠なり相當の準備ありや  
と野衲曰く一片の丹心一軀の尊像是我が為に  
千萬の味方なり而して囊中尚百金の餘財  
ありと事務官直に囊底を拂つて巨額の路  
銀を惠まれ且種々の注意を與へられ候旅順開  
戦の事は已に聞得たり當港には戒嚴令を布  
かれ候ゆゑ最早日本人の居住を許されず唯今

事務官一行の乗込める引揚船を見送りたらん  
後には當港に日本人としては野衲唯一人にて候  
目下露人の暴行よりは寧ろ支那勞働者が  
家財を奪はんとて襲ひ来る勢甚だ猖獗を極  
め居候野衲一人の力到底之を防ぐに由なし今  
夜は須彌壇の下に隠れて一夜を明かし彼等の掠  
奪を恣にせしめ明朝一番汽車にてハバロフスク  
に到り順次黒龍江沿岸地方に残留せる同胞  
を歴訪慰問致すべし候野衲固より生還を期せ

ず候ども唯此の上は一日にても永く命を保ちて  
一人にても多くの人々を慰問しなき心願にて  
候野衲の此の行必ず大悲の御冥見あらせ  
給ふを確信致候遙かに東方を望みて  
陛下の萬歳を祝し奉り候匆々

明治三十七年二月十三日浦塩斯德港棧橋にて

太田覺眠

芳賀矢一

國文學者  
東京帝國大學名譽教

授

國學院大學長

文學博士

越前國福井生

昭和二年薨

年六十一

シーボルト

Siebold

## 二四 尊皇の精神

芳賀矢一

余が獨逸留學中、或年の天長節の祝宴に、日本の近世史に關係あり、日本の勳章を帯びて居る男爵シーボルト氏の演説を聽いて、其の中の一節に感じた事がある。同氏の言は「西洋各國の革命は國王に對する不滿から起つて、其の結果はいつも王室の權威を縮小し、或は全く顛覆するものであるが、日本のは之に反して、革新毎に皇室の稜威を益し、繁榮を増進する」といふ意味であつた。これは如何にもよく我が國體の萬國に異なつてゐることを言明したものといはねばならぬ。かの大化改新といひ、明治維新といふ政治上の

二大變動は、我が國なればこそ極めて容易に成就して、雨降つて地固まるといふ結果が得られたのである。新しい文化に接して之を採用する必要の生じた時、制度改正の詔勅が一度渙發すれば、祖先以來の領土領民も差出し、既得將來の權利も悉く打棄てて、唯々諾々として大命を承るといふことは、決して外國人にはあり得べからざる事實である。これであればこそ我が國民は萬世一系といふ國體を維持し、時代の進歩に伴なつて進歩したのである。西洋諸國の帝王も、支那の天子も、國民の間から起つて、或は權力を以て、或は輿望によつて、遂に帝王の位を贏ち得たのである。素生を洗ひ、祖先を正せば、同等の國民である。是

王侯將相  
支那の秦末に起つた  
陳勝の語

が諸外國民の王室に對する考であつて、皇室に對する我々日本人の考とは全くちがつてゐるのである。支那には王侯將相寧んぞ種あらんや」といふ語があるが、日本人は帝王といふ位は國民の決して覬覦すべきものでないと、誰も教へはしないが、祖先以來さう考へてゐる。長い歴史の中には皇家に弓を引いたものも無い事は無いが、天子の位をねらふ様な考は決して無い。大日本史には源義朝や源義仲が叛臣傳に入れてある。これは天子に向つて敵對した事について大義名分を正したので、固より皇室を陥れようとした謀反人では無い。いづれも皇室の信任を失つた悔しまぎれに手向ひした亂暴人に過ぎぬ。多くは朝廷の或官

位を得たいが、それが得られぬ爲に、騒動を起して我が儘を通さうといふ輩で、叛臣と雖も朝廷の尊さを忘れぬのである。平將門も檢非違使になれなかつた爲に謀反したのである。唯一人弓削道鏡といふ坊主が、佛法・王法を一つにして自分がその位に坐らうといふ不屈な料簡を起したが、忠誠な臣民の聲は宇佐八幡の神託となつて、忽ち之を排斥した。其の外には一人も無い。

平清盛は利己主義の結晶で、入る日を招き返したといふ傳説のある程であるが、これとても平氏といふ家柄で太政大臣といふ人臣の極位に上つたのを家門の大名譽と信じたのである。我が儘が募つて法皇を幽閉し奉らうとした時、

法皇  
後白河法皇

蓮府

宰相たる家柄

支那の南齊の宰相王儉が相府に蓮を栽ゑた故事から出た語

槐門

宰相たる家柄

三槐ニ面シテ三公位ス。(周禮)

小松重盛が、

先祖にも未だ聞かざつし太政大臣を極めさせ給ふ。重盛が無才愚暗の身を以て、蓮府槐門の位に至る。しかのみならず國郡半ばは一門の所領となつて、田園悉く一家の進止たり。これ希代の朝恩にあらずや。

と諫めたので、入道も弱り切つて、其の言に従つたのである。承久の役に北條泰時がわざ／＼途中から引返して、若し道のほとりにも、計らざるに辱く鳳輦を先立てて御旗を擧げられ、臨幸の嚴重なることも侍らんに參りあはば、其の時の進退如何侍るべからん。この一事を尋ね申さんとて一人馳せ侍りき。

といふに對して、義時は、

かしこくも問へる男かな。その事なり。まさに君の御輿に向ひて弓引くことは如何あらん。さばかりの時は兜を脱ぎ、弓の弦をきりて、偏にかしこまりを申して、身をまかせ奉るべし。

と答へた。如何なる悪人でも、叛人でも、皇室を尊ぶ考は必ずもつて居て、支那や諸外國の様に、折がよければ取つて代らうなどといふ考は毛頭微塵もない。我が國史の波瀾は皇族間の御確執か、否らざれば皇位の下で、權臣が其の權力を争ひ合つた現象に外ならぬのである。これが外國人の目からは不審に見える。我が國民の性質



ブルボン	Bourbon	Hohenzollern	Romanoff	劉氏	李氏	愛親覺羅氏	支那の清朝の姓
前の佛國王室の姓	ホーエンツォルレルン	前の獨逸帝室の姓	前の露國帝室の姓	支那の漢朝の姓	支那の唐朝の姓	支那の清朝の姓	

を知らぬ人の目からは、萬世一系といふことが如何にも不思議に感ぜられる。世界に唯一であるから、もとより不思議には相違ない。ブルボンだの、ホーエンツォルレルンだの、ロマノフだの、劉氏だの、李氏だの、愛親覺羅氏だのと、外國の朝家には皆姓や朝號があるが、我が皇室にはない。この理由が分らなければ、日本の歴史を理解することは出来ない。開關以來君臣の分が定まつてゐるといふことは、歴史上の事實からの説明を待たず、有史以前から我が民族の腦裏にしみわたつた金言である。(國民性十論)

### 新國文讀本 卷四 終

### 文部省檢定

用科教科文漢語國校學中 日三十月一年八和昭  
 用科教科語國校學業實 日三十月七年八和昭

昭和七年八月二十二日印  
 昭和七年八月二十五日發  
 昭和八年一月二十二日修正再版印刷  
 昭和八年一月二十五日修正再版發行



本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はば直に御送本可致候

編者 發行者 發行所 印刷者

定價各金六十錢

東京市小石川區高田老松町五二番地 吉田彌平  
 東京市神田區神保町一丁目五番地 上原才一郎  
 東京市牛込區市谷加賀町一丁目二番地 光風館書店  
 (電話 神田三〇八七番) (振替口座東京三二七番)  
 株式會社 秀英舎 根本力三

二二

(19)

小林乙二

宿をがらう  
今晚も又櫻の花の木陰に  
この吉野山の美しい景色を愛して  
誰かめるとソウかわけでもなすが